

# 源氏物語

## 若菜（上）卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫



源氏物語

若菜（上）

紫式部

與謝野晶子訳

たちまちに知らぬ花さくおぼつかな天<sup>あめ</sup>  
よりこしをうたがはねども （晶子）

あの六条院の行幸<sup>みゆき</sup>のあつた直後から朱雀院<sup>すざく</sup>の帝<sup>みかど</sup>は御病氣になつておいでになつた。平生から御病身な方ではあつたが、今度の病におなりになつてからは非常に心細く前途<sup>おぼしめ</sup>を思召すのであつた。

「私はもうずっと以前から信仰生活にはいりたかったのだが、太后がおいになる間は自身の感情のおもむくままなことができないで今日に及んだのだが、これも仏の御催促なのか、もう余命のいくばくもないことばかりが思われてならない」

などと仰せになって、御出家をあそばされる場合の用意をしておいでになった。皇子は東宮のほかには女宮様がただけが四人おいでになった。その中で藤壺ふじつぼの女御にようごと以前言われていたのは三代前の帝の皇女で源姓みなもとせいを得た人であるが、院がまだ東宮でいらせられた時代から侍さむらいしていて、后きさきの位にも上ってよい人であったが、たいした後援をする人たちもなく、母方といっても無勢力で、更衣こういから生まれた人だったから、競争のはげしい後宮の生活もこの人には苦しそうであって、一方

では皇太后が尚侍ないしのかみをお入れになつて、第一人者の位置をそれ以外の人に与えまいという強い援助をなされたのであつたから、帝も御心みこころの中では愍然びんぜんに思召しながら後に擬してお考へになることもなく、しかもお若くて御退位をあそばされたあとでは、藤壺の女御にもう光明の夢を作らせる日もなくて、女御は悲観をしたまままで病氣になり薨去こうきよしたが、その人のお生みした女三にょさんの宮みやを御子みこの中のだれよりも院はお愛しになつた。このころは十三、四でいらせられる。世の中を捨てて山寺へはいったあとに、残された内親王はだれをたよりに暮らすかと思召されることが院の第一の御苦痛であつた。西山に御堂みじうの御建築ができて、お移りになる用意をあそばしながらも、一方では女三の宮の裳着もぎの挙式したくの仕度をさせておいでになつた。貴重な多くの御財産、美術の

価値のあるお品々などはもとより、楽器や遊戯の具なども名品に近いような物は皆この宮へお譲りになって、その他の御財産、お道具類を他の宮がたへ御分配あそばされた。

東宮は院の重い御病氣と、御出家の御用意のあることをお聞きになって、お見舞いの行啓をあそばされた。母君の女御もお付き添いして行った。しゅちよう殊寵があつたわけではないが、東宮の御母となる宿縁のあつた人を御尊重あそばされて、院はこの方にもこまやかにお話をあそばされた。東宮にも帝王とおなりになる日のお心得事などをお教えあそばされるのであつた。御年齢としよりも大人おとなびておいでになったし、御後援をする人が母方のそばにも多くある方であつたから、院は御安心をしておいでになるのである。

「私はもうこの世に遺憾だと心に残るようなこともない。ただ内親王たちが幾人もいることで将来どうなるかと案ぜられることは、今の場合だけでなくこの世を離れる際にも絆ほだしになるであらうと思われる。今まで一般の世の中に見ていても、女というものは、その人の意志でもなしに、ほかから働きかける者のために悪名も立てられ、恥辱も受けるような運命になっていくのがかわいそうだ。どの姉妹きょうだいにもあなたの御代みよが来た時にはあたたかい庇護を加えてやってもらいたい。その中でも後見をする母などのついている者は託して行く所があるような気もしてまずいいが、女三の宮は年のゆかないのに母のない内親王なのだから、私だけをたよりにして育ってきたことを思うと、私が寺へはいったあとではどんな心細い身の上になることかと気がかりでならな

い」

と、涙をお拭ぬぐいになりながら東宮へ後事をお頼みになるのであった。母君の女御にも信じ切ったようにして院は女三の宮のことを仰せになった。とはいっても昔宮中にあつた時代には、内親王の御母の女御は格別な御寵愛ちようあいを得ていて、この方にとっては強力な競争者だったのであるから、その宮にまで憎悪ぞうおを持つわけではないが真心からお世話をする気にはなれなかつたであらうと想像される。

院は明けても暮れても女三の宮の将来についてばかり御心配をあそばされるせいもあつて、年末が近づいてから御容態がいちじるしくお悪くなり、御簾みすの外へおいでになることもなくなった。これまでも妖もの氣がもとでおりおりお煩わづらいになることはあつても、こんなに続いて永なが



く御容態のすぐれぬようなことはなかったのであるから、御自身では御命数の尽きる世が来たというように解釈をあそばすのであった。御退位になってからも御在位時代に恩顧を受けた人たちは、今も優しく寛容な御性質をお慕い申し上げて、屈託なことのある時の慰安を賜わる所のようにして参候する慣いになつていて、その人たちは院の御悩ごのうの重いのを皆心から惜しみ悲しんでいた。六条院からお見舞いの使いが常に来た。そのうち御自身でもおいでになりたいという御通知のあつた時、院は非常にお喜びになつた。六条院の御子の源中納言が参院した時に、御病室の御簾みすの中へお招きになり、朱雀院すざくはいろいろなお話をあそばされた。

「お崩れかぐになつた陛下が御終焉しゅうえんの前に私へいろいろな御遺言をなされ

たのだが、その中で特に六条院と今の陛下のことについては熱心に仰せられて私へお託しになったのだが、帝王というものになつては、自分の意志を單純に実行へ移すことのできない点があつてね。個人としての愛は少しも変わらなかつたが、しかも私の過失によつて、あの方にとつて私が恨めしかつただろうと思うこともしたのに、今日までそれに対する復讐的なことは何の端にもお見せにならない。どんな賢人でも自身の問題になると恨むことも憎むことも凡人どおりにすることからいろいろな事件の起こるのは歴史の上にあることだからね。機会があれば私への復讐が姿になつて現われることであろうと、世人も言うことだつたし、私自身も罰を受ける氣でいたのだが、あの方に見たのは絶対の愛だけだつた。東宮などにも好意をお寄せになつたり、ま

た現在では婿舅むこしゅうとの関係までも作っていたいでいるのを私はどんなに感激しているかshれないが、愚かな上に盲目的な親の愛までも暴露してお目にかけることも恥ずかしくて、父である私が東宮に対してかえって冷淡なふうをしている。陛下のことは院の御遺言どおりに万事計らって位をお譲り申し上げたから、この聖天子を国民がいただきうることになり、私の不名誉まで取り返していただいている。これだけは意志を強くして遂行なしえた善事だと信じて満足している。六条院にこの秋の行幸の節にお目にかかった時から、私の心にはしきりに青春時代の兄弟間の愛が再燃してお目にかかりたくてならない。直接お目にかかってお話し申したいこともある。ぜひ御自身でおいでくださるようになたからもお勧めしてほしい」

などとしおれたふうで院が仰せられたのである。

「御過失でございましたか、正当な御処置でございましたか、昔のこととは今になって御批評の申し上げようもございません。私が大人になりましたして一官吏の職を奉じますようになりましたから、私のために院がいろいろの注意を実例によってお与えくださいます際などにも、自分えんざいは冤罪えんざいによってどんなことが過去にあったというようなことを少しでも仰せになることはございません。一生を通じて陛下の御補佐をすべきであることを、人生を静かに考えたい欲求から途中で閑散な地位に移らせていただいたために、故院の御遺言もお守りできぬことになり、またあなた様に対しては御在位の節には若輩であり、力もなく、上のかたがたが多くおいでにもなって、御自身の至誠をお尽くしする

機会がなかったと申されまして、静かな御環境においでになります今日  
はせめてたびたび御訪問も申し上げてお話も承りたいのを、さすが  
に事の大仰おおぎようになるのに遠慮されて御無沙汰ごぶさたを申し上げているとこんな  
ことをおりおり歎息たんそくしておいでになるのでございます」

などと中納言は申し上げた。二十歳はたちに少し足らぬのであるが、すべ  
てが整って美しいこの人に院の御目はとまって、じっと顔をおながめ  
になりながら、どう処置すべきかと御煩悶はんもんあそばされる姫宮を、この  
中納言に嫁とつがせたならと人知れず思召おぼしめされた。

「太政大臣の家に行っているそうだね。長い間私なども大臣の態度を  
腑ふに落ちなく思っていたところ、円満な結果を得てよいことと思つて  
いるが、またどうしたとか大臣がうらやまれもしてね」

との院の仰せを不思議に思つて中納言は考えてみたが、それは女三の宮のお身の上をとやかくとお案じになつて、相当な人があれば結婚をさせて安心して宗教の中へはいりたいという思召し<sup>おぼしめ</sup>が院におありになるということがほかから耳にもはいつていたことであつたから、その問題に触れて仰せられることかと気がついたものの、呑<sup>の</sup>み込み顔なお返辞はできないことであつた。ただ、

「つまらない者でございますから、配偶者を得ますこともとかく困難でございますして」

と申し上げるのにとどめた。

のぞき見をしていた若い女房たちが、

「珍しい美男でいらつしやる。御様子だつてねえ、なんというごりつ

ばさでしよう」

集まってこんなことを言っているのを、聞いていた老<sup>ふ</sup>けたほうに属する女房らが、

「それでも六条院様のあのお年ごろのおきれいさというものはそんなものではありませんでしたよ。比較には、まあありませんね、それはね、目もくらんでしまうほどお美しかったものですよ」

と言つても、若い人たちは承知をしない。こうした争いのお耳にはいった院が、

「そのとおりだよ。あの人の美は普通の美の標準にはあてはまらないものだつた。近ごろはまたいつそうりっぱになられて光彩そのもののような気がする。正しくしていられれば端麗であるし、打ち解<sup>じょう</sup>けて冗

談でも言われる時には愛嬌があふれて、二人とないなつかしさが出てくる。何事にもどうした前生の大きな報いを得ておられる人かとすぐれた点から想像させられる人だ。宮廷で育って、帝王の愛を一身に集めるような幸福さがあつて、まったくだよ。故院は御自身の命にも代えたいほど御大切にあそばしたものだ、それで慢心せず謙遜で、二十歳までには納言にもならなかった。二十一になつて参議で大将を兼ねたかと思う。それに比べると中納言の官等の上がり方は早い。子になり孫になりして威福の盛んになる家らしい。実際中納言は秀才であり、確かな教養を受けている点で昔の光源氏にあまり劣るまい。父君の昔に越えて幸福な道を踏んでもそれが不当とも思えない偉さが彼にある」



と御甥<sup>おい</sup>をほめておいでになった。可憐<sup>かれん</sup>な姫宮の美しく無邪気な御様子<sup>ようす</sup>を御覧<sup>ごらん</sup>になつては、

「十分愛してくれて、足りない所は蔭<sup>かげ</sup>で教育してくれるような、そして安心して託せるような人を婿に選びたい気がする」

などと仰せられた。

乳母<sup>めのと</sup>の中でも上級な人たちをお呼び出しになって、裳着<sup>もぎ</sup>の式の用意についていろいろお命じになることのあつたついでに、院は、

「六条院が式部卿<sup>しきぶきやう</sup>の宮の女王<sup>にようおう</sup>を育て上げられたようにして、この宮の世話をする男はないのだろうか。普通人の中に私が選<sup>えら</sup>び出すような人格者はまずないらしい。宮中には中宮<sup>ちゆうぐう</sup>がおいでになる。その下の女御<sup>にようご</sup>たちもよい後援者のついている人ばかりだからね。たいした後ろだて

がなくて後宮の生活をするのは苦勞の多いことに違いない。今日の権中納言が独身でいたところに話をしてみるのだった。若いがりっぱな秀才で将来の頼もしい人らしいのに」

こんなこともお言いになった。

「中納言は初めからまじめ一方な方でございますから、今までも初恋のあの奥様のことばかりを思いつめて、失恋時代にもほかの話に耳をかさなかった人でございました。そのお姫様とごいっしょにおなりになったただ今では、第二の結婚のお話があの方を動かしうるものでもございますまい。私どもはかえって六条院様にその可能性がおりになるように存じ上げます。恋愛好きで女性に好奇心をお持ちになることは今も昔のままのようだと申すことでございます。その中でも最高

の貴女に趣味をお持ちあそばして、前斎院様などを今になっても思つておいでになるそうでございます」

と女宮の乳母の一人が申し上げた。

「その今でも恋愛好きである点はありがたいことだね」

院はこう仰せられたが、乳母が言うように六条院には多くの夫人や愛人があつて、唯一の妻と認めさせることはできないでも、やはりその人を親代わりの良人おとに選ぶのが最善のことであるかもしれぬというお考えを院はあそばしたようである。

「おまえの言うことはおもしろいよ。よい生き方をさせたいと思う女の子があつて、配偶を求めるなら、あの院に愛されることを願うのがほんとうのようだ。人生は短いのだから、生きがいのあることをだれ

も願うべきだよ。私が女であれば兄弟であつても兄弟以上の接近もすることだろう。真実若い時に私はそう思ったのだ。そうなのだから女が誘惑にかかるのは道理で、また自然なことなのだよ」

院は御心みこころの中に尚侍ないしのかみの事件を思い出しておいでになった。

この中の最も重立った一人の乳母めのとの兄で、左中弁なにかしの某は六条院の恩顧を受けて、親しくお出入りしていたが、一方ではこの姫宮を尊敬する伺候者の一人であつた。この人の来た時に妹である乳母が朱雀院すざくの御希望を語つた。

「この話をあなたから六条院様に機会おりがありましたら申し上げてみてください。内親王様は一生御独身が原則のようですが、婿君としてどんな場合にもお力の借りられる方をお持ちになるのは、御独身の宮様

よりも頼もしく思われます。院のほかには誠意のあるお世話をお受けになる方をお持ちあそばさない宮様ですからね。私がどんなにお愛し申し上げていまして、それは限りのあることしかできないのです。それに私一人がお付きしているのでなく、とおおぜいの人がいるのですから、だれがいつどんな不心得をして失礼な媒介役を勤めるかもしれません。そしてどんな御不幸なことになるかわかりません。院がおいになりますうちにこの問題が決まりますれば私は安心ができてどんなに楽だろうと思います。尊貴な方でも女の運命は予想することできませんから不安で不安でなりません。幾人いくたりもおいになる姫宮の中で特別に御秘蔵にあそばすことで、また嫉妬しつとをお受けになることにもなりますから、私は気が気でもありません」

「お話はしますがよい結果が得られることかどうか。院は御恋愛の上で飽きやすいとか、気がよく変わるとかいうことはない方で、珍しい篤実性を持っておられます。仮にも愛人になすった人は、お気に入りに入つた入らぬにかかわらず皆それ相応に居場所を作っておあげになつて、幾人もの御夫人、愛姫いくたりというものを持つておいでになるというもの、煎じせんつめれば愛しておいでになる夫人はお一人だけということになる方がおいでになるのだから、そのために同じ院内においでになるというだけで寂しい思いをして暮らしておられる方も多いようですからね。もし御縁があつて姫宮があちらへお移りになつた場合には、紫の女王様がどんなにすぐれた奥様でも、これにお勝ちになることは不可能でしょうとは思いますが、あるいは必ずしもそういかない場合も

想像されます。しかしまた院が、自分はすべての幸福に恵まれているが、熱愛では人の批難を受けもしているし、私自身にも不満足を感じる点もあると何かの場合にお洩<sup>も</sup>らしになるが、私らとしてもそう思われる節<sup>ふし</sup>がないでもない。夫人がたといっても今までの方はただの女性で、内親王がたが一人も混じっておいでなりませんからね。私らとしては院の御身分として姫宮様級の御夫人があつてしかるべきだと思われまますからね。今度のことが実現されたらどんなにすばらしい御夫妻だろう」

と左中弁は言うのであつた。乳母<sup>めのと</sup>は何かのことを朱雀院<sup>すざく</sup>へ申し上げたついでに、自分が試みに前日兄の左中弁へした話を申し上げて、「兄が申しますのには院は必ず御承諾あそばされることと思う。六条

院は年来の御希望がかなうことと思召すに違いない御縁談であるから、こちらのお許しさえあればお伝えいたししようと申しました。

どういたしたらよろしゅうございましょう。御愛人にはそれぞれ御身分に応じた御待遇をあそばしまして、思いやりの深いお方様と承りますけれど、普通の女の方でもほかに愛妻のある方と結婚をすることを幸福とはいたさないのでございますから、御不快な思いをあそばすことがないとも思われません。姫宮様をいただきたいと望む人はほかにもたくさんあるのでございますから、よくお考えあそばしましてお決めなさいますのがよろしゅうございましょう。宮様は最も尊貴な御身分でいらつしゃいますが、ただ今の世の中ではりりしく独身生活を取りっぱにしていく婦人がたもありますのに、三の宮様はどうもその点



で御安心申し上げられない強さが欠けておいであそばすのですから、私たち侍女どもは一所懸命の御奉仕をいたしましても、それはたいした宮様のお力になることでもございませんから、世間の女の例によつて、変則な独身でお立ちになろうとあそばさないで、御結婚をあそばすほうが御安心のおできになることと存じます。特別な御後見をなさいます方のないのはお心細いことでないかと存じ上げます」

と、自身の意見も述べた。

「私も宮のことをいろいろと考えて、内親王は神聖なものとしておきたくも思うし、また高い身分の者も結婚したがために、内輪のことも世評に上るようになるし、しないでよいはずの煩悶はんもんで自身を苦しめることにもなるのだからと否定に傾きもするのだが、また親兄弟にも別

れたあとで、女が独身でいては、昔の時代の人は神聖なものは神聖なものとしておいたが、近代の男はそれを無視して強要的な結婚を行なうのに躊躇ちゆうちよしない悪徳を平気でするようになったために、いろんな噂うわさの種もまくのだがね。昨日までは尊貴な親の娘として尊敬されていた人が、つまらぬ男にだまされて浮き名を立て、ある者は死んだ親の名誉をそこなうという類たぐいの話は幾つもあるから、姫宮であつても女であれば同じことで、宿命などということはわからぬものだから、私が配偶者を選ばずに捨てておくことは不安だとも一方では考えられる。良くなつても悪くなつても、それは自発的に決めたことでなくて親や兄が選んだ結婚をしておれば、悪いことがあとにあつてもその人の責任にはならないで済むし、恋愛結婚のあとが良くなれば、ああし

たことの結果も良くなるものであるとは見えても、その初めに噂の広まったところには、親の同意も得ず、家族も許さないのに恋愛をして良<sup>おつ</sup>人を持<sup>と</sup>ったということは女の第一の恥と聞こえるからね。それは普通の家の娘の場合でも軽佻<sup>けいちよう</sup>に思われることに違いない。また自分は自分の身体<sup>からだ</sup>の持ち主であるのに、それを暴力で蹂躪<sup>じゆうりん</sup>された結果、意外な男の妻になるようなことも軽率で、その女を侮蔑<sup>ぶべつ</sup>したくなるが、姫宮も元来弱い、隙<sup>すき</sup>の見える性質ではないかと私は心配しているのだから、侍女どもが勝手なことを宮に押しつけるようなことをさせてはならないよ。そんな噂が世間へ聞こえては恥ずかしいからね」

などとお別れになったあとのことまでもお案じになって仰せられることで、乳母たち、女房たちは責任の重さを苦勞に思った。

「もう少し大人になられるまで私がついていたいと、今まで念じ続けてきたものだが、このごろの健康状態でそうしては、信仰生活にはいることもできずに死んでしまうのではないかという気がされるので、やむをえず出家を断行することにした。六条院に託しておくのが、なんといつてもいちばん安心のことだと思う。幾人いくたりも侍している夫人はあつてもそれをいちいち念頭に置いてゆかねばならぬことでもなし、ただ主観的にこちらさえ寛大な心を持って臨めばよいことなのだ。はなやかな時代も過ぎて平淡な心境におられるあの院に三の宮の良人おとととなっていたくことは最も安心なことだと私は認めている。そのほかに適当な候補者はないよ。兵部卿ひょうぶきょうの宮は風采ふうさいも人物もひととおりはりっぱな人だがね、それに私としては兄弟のことだから他

人のようにひどい批評はできないものの、とにかくあの人はあまりに柔弱で、芸術家に傾き過ぎて、世間の信望が少し薄いようだ。そんなふうな人は良人として頼もしくは思われない。また大納言が臣礼をもって奉仕しようというのは親切な男というべきだが、さてそれに許してやる気にはちよつとなれない。やはり普通の男の妻には与えにくい気がする。昔の時代にも帝王の婿にはある一事の傑出した人物が選ばれたようだ。ただ都合のよいというようなことで人選するのは恥ずかしいことだ。右衛門督がやはりその希望を持っているということないしのかみを尚侍が言っていたが、あれだけはすぐれた人物だから、官位がもう少し進んでいたら私も大いに考慮するが、まだ今のところでは地位が不十分だ。理想が高くてだれとも結婚をせずにまだ独身でいて思

がった精神が実によい。学問も相当なものだし、廟堂に立つて仕事のできる点で将来も有望だが、私には愛女の婿はそれでもないという心がある。相当に濃厚にある」

こんなふう<sup>おぼしめ</sup>に仰せられて院はお心を悩ませておいでになった。多い候補者の中の婿選<sup>によさん</sup>びを困難に思召す女三の宮<sup>みや</sup>以外の姉宮がたに求婚をする人はさてないのである。院がどんなにその一方<sup>ひとかた</sup>をお愛しになつて、よい配偶をお決めになることに専心しておいでになるかというところが、院内から自然に外へ聞こえ、自身を候補に擬しているものが多いのである。太政大臣も長男の右衛門督がまだ独身でいて、妻は内親王でなければ結婚はせぬと思うふうであるから、御降嫁が決定してだれもお許しを願つて出た時に、院の御婿に長男が選ばれたなら、ど

んなに自身のためにも光栄であるかしの考え、院の御寵姫ちようきの尚侍の所へは、その人の姉である夫人から言わせて運動もし、一方では直接お話も申し上げて懇請もしていた。兵部卿の宮は左大将の夫人に失恋をあそばされたのであるから、その夫婦に対してもりっぱでない結婚はできないようにお思いになって、夫人を選んでおいでになる場合であつたから、お心の動かないわけではない。非常に熱心な求婚者で宮はおありになった。藤大納言とうは長い間院の別当をしていて、親しく奉仕して来た人であつたから、院が御寺みでらへおはいりになれば有力な保護者を失いたてまつることになるのを、内親王と結婚をして今後も地位の保証を得たいという功利的な考えからしきりにお許しを乞こうていたのであつた。源中納言げんも院の御婿の候補者が続出するのを見ては、

この人には間接でなく、あれほどにも明瞭に御意のあるところをお見せになったのであるから、中間によい人を得て姫宮をお望み申し上げた場合には冷淡な態度を院はおとりになるまいという自信もあつて、心がときめきもするのであるが、自身を信賴している妻を見ては、過ぎ去つたあの苦しい境地に置かれて、もう絶縁をしてもよかつた時代にさえなお自分はこの人以外の女を対象として考えようともせず通して来て、二度目の結婚を今さらすればにわかに妻は物思ひをすることになろうし、一方が尊貴な人であれば自分の行動は束縛されて、思つていてもこちらを同じに扱うことができずに、左にも右にも不平があれば自分は苦しいことであろうという氣になつて、元来が多情な人ではないのであるから、動く心をしておさえて何とも表面へは出さな



いのであるが、さすがに姫宮の婚約が他人と成り立つことは願われな  
いで、この人のためには一つの心を離れぬ問題にはなった。東宮もこ  
の婿選びのことをお聞きになって、

「目前のことよりも、そうしたことは後世への手本にもなることです  
から、よくお考えになった上で人を選定あそばされるがよろしく思わ  
れます。どんなにりっぱな人物でも普通人は普通人なのですから、結  
局は六条院へお託しになるのが最善のことと考えます」

とこれは表だった使いで進言されたのではないが、ある人をもって  
申された。

「もつともな意見だ。非常によい忠告だ」

院はこうお言いになって、いよいよその心におなりになり、まず三

の宮のお乳母めのとの兄である左中弁から六条院へあらましの話をおさせになった。女三の宮の結婚問題で院が御心痛をしておいでになることは以前から聞いておいでになったから、

「御同情する。お気の毒に存じ上げている。しかし院が御生命の不安を感じになったとすれば、私だって同じことなのだからね。どれだけあとへお残りする自信をもって御後事がお引き受けできると思うかね。御兄が先で、弟があとというそれも決まっていもせぬことを仮にそうとして私が何年かでも生き残っている間は、どの宮だって血縁のある方なのだから私はできるだけの御保護はするつもりなのに、しかも特別お心がかりに思召おぼしめす方にはまた特別のお世話もするが、しかしそれだって無常の人生なのだから、自分の生命いのちが受け合われない」

とお言いになつて、また、

「まして私の妻にしておくことはどんなによくないことかしかない。  
私が院に続いて亡<sup>な</sup>くなる時に、どんなにまたそれが私の気がかりにな  
ることか。私だけのことを考えても執着の残ること、なすべきこと  
でないと思われる。私の子の中納言などは年も若くて軽い身分であつ  
ても、将来のある人物だからね。国家の柱石となる可能性を持ってい  
るのだから、中納言などへ御降嫁になつてもそれが調和のとれないこ  
ととは思われない。しかしあまりにまじめ過ぎる男で、一人の妻と円  
満に家庭を持っているということ、院は御遠慮になるだろうか」

こうもお言いになつて、御自身の結婚問題としてお取り上げになら  
ないのを弁は見て、朱雀院<sup>すざく</sup>のほうでは堅い御決意で申し入れをさせて

おいでになるのであるがと残念にも思い、朱雀院をお気の毒にも思つて、あちらの院がこのことの成り立つのを熱望しておいでになる事情をくわしく申し上げると、さすがに院は微笑をされて、

「非常な御愛子なのだろうから、いろいろと将来を御心配になつてのお考えだろう。宮中へお上げになればいいではないか。りっぱな後宮のかたがたがすでにおられるからといって、望みのないもののように思われるのは誤りだよ。故院の時に皇太后が東宮時代からの最初の女御で、たいした勢力を持つておいでになつたが、それがずっとのちにお上がりになつた入道の宮様にその当時はけおとされておしまいになつた例もあるのだからね。その宮の母君の女御は入道の宮のお妹さんだった。御容貌なども入道の宮に続いてお美しいという評判のあつ

た方だから、御両親のどちらに似てもこの宮は平凡な美人ではおありになるまい」

などと言っておいでになった。好奇心は持つておいでになるらしいのである。

歳暮に近くなつた。朱雀院では院の御病氣がそのまま続いてお悪いために、姫宮の裳着もぎの式をお急ぎになり、準備をいろいろとさせておいでになったが、過去にも未来にもないような華美なお儀式になる模様で、だれもだれも騒ぎ立っていた。式場は院の栢殿かえどのの西向きのお座敷で御帳おんとばり、几帳きちようその他に用いられた物も日本の織物はいっさいお使いにならず唐きんぎの後の居室の飾りを模うつして、派手はでで、りっぱで、輝くようにでき上がっていた。御腰結ゆいの役を太政大臣へ前から依頼しておあ

りになったが、もったいぶったこの人は気は進まないままで、院のお言葉には昔からそむくことのなかったほど好意をお示しする用意は常に持つて、御辞退ができずに参列したのであった。そのほかの左右二大臣、高官らも万障を排し病氣もしいて忍ぶままでにして座に加わったものである。親王様はお八方来ておいでになった。いうまでもなく殿上人の数は多かった。宮中の奉仕をする者も東宮の御殿へお勤めする者も残らず集まったのであつて、盛大なお儀式と見えた。やがて出家をあそばされようとする院の最後のお催し事と見ておいでになつて、帝も東宮も御同情になり宮中の納殿おさめじのの支那渡来しなの物を多く御寄贈になつたのであつた。六条院からも多くの御贈り物があつた。それは来会者へ纏頭てんとうに出される衣服類、主賓の大臣への贈り物の品々等であ

る。中宮からも姫宮のお装束、櫛くしの箱などを特に華麗に調製おさせになつて贈られた。院が昔このお后じゅだいの入内の時お贈りになつた髪上げくしあの用具に新しく加工され、しかももとの形を失わずに見せたものが添えてあつた。中宮ごんのすけ権亮は院の殿上へも出仕する人であつたから、それを使いにあそばして、姫宮のほうへ持参するように命ぜられたのであるが、次のようなお歌が中にあつた。

さしながら昔を今につたふれば玉の小櫛をぐしぞ神さびにける

これを御覧になつた院は身にしむ思いをあそばされたはずである。縁起が悪くもないであろうと姫宮へお譲りになつた髪髪の具は珍重すべ

きものであると思召されて、青春の日の御思い出にはお触れにならず、お悦びよろこの意味だけをお返事にあそばされて、

さしつぎに見るものにもが万代よろづよをつげの小櫛も神さぶるまで

とお書きになった。

御病気は決して御輕快になつていなかったのを、無理あそばして御挙行になった姫宮のお裳着の式から三日目に院は御髪みぐしをお下ろしおになったのであつた。普通の家でも主人がいよいよ出家をするという時の家族の悲しみは大きなものであるのに、院の御ためには悲しみ歎なげく多くの後宮の人があつた。尚侍はじつとおそばを離れずに歎なげきに沈ん



でいるのを、院はなだめかねておいでになった。

「子に対する愛は限度のあるものだが、あなたのこんなに悲しむのを見ては私はもう堪えられなく苦しい心になる」

と仰せになつて、御心は冷静でありえなくおなりになるのであるが、じつと堪えて脇息きようそくによりかかつておいでになった。延暦寺えんりやくじの座主ざすのほか戒師を勤める僧が三人参つていて、法服に召し替えられる時、この世と絶縁をあそばされる儀式の時、それは皆悲しいきわみのことであつた。すでに恩愛の感情から超越している僧たちでさえとどめがたい涙が流れたのであるから、まして姫宮たち、女御にょご、更衣こうい、その他院内のあらゆる男女は上から下まで嗚咽おえつの声をたてないでいられるものはない、こうした人間の声は聞いていずに、出家をすればすぐ

に寺へお移りになるはずの、以前の御計画をお変えになったことを院は残念に思召<sup>おぼしめ</sup>して、皆女三の宮へ引かれる心がこうさせたのであるとかたわらの者へ仰せられた。宮中をはじめとしてお見舞いの使いの多く参ったことは言うまでもない。

六条院は朱雀院<sup>すざく</sup>の御病気が少しおよろしい報<sup>しら</sup>せをお得になつて御自身で訪問あそばされた。宮廷から封地<sup>ほうち</sup>をはじめとして太上天皇<sup>だいじょう</sup>と少しも変わりのない御待遇は受けておいでになるのであるが、正式の太上天皇として六条院は少しもおふるまいにならないのである。世人のささげている尊敬の意も信賴の心も並み並みではないのであるが、外出の儀式なども簡単にあそばして、たいそうでない車に召され、お供の高官などは車で従つて参った。朱雀院法皇はこの御訪問を非常にお喜

びになって、御病苦も忍ぶようにあそばされて御面会になった。形式にはかかわらずに御病室へ六条院の今一つの座をお設けになって招ぜられたのである。御髪みぐしをお剃り捨そてになった御兄の院を御覧になった時、すべての世界が暗くなったように思召されて、悲歎ひたんのとめようもない。ためらうことなくすぐにお言葉が出た。

「故院がお崩れかぐになりましたところから、人生の無常が深く私にも思われまして、出家の願いを起こしながらも心弱く何かのことに次々引きとめられておりまして、ついにあなた様が先にこの姿をあそばすまでになってしまいました。自分はなんというふがいなさであろうと恥ずかしくてなりません。一身だけでは何でもなく出離しゅつりの決心はつくのでございますが、周囲を顧慮いたします点で実行はなかなかできないこ

とでございます」

と、お言いになって、慰めえないお悲しみを覚えておいでになるふうであつた。朱雀院<sup>すざく</sup>も御病氣であつて心細いお気持ちもあそばされる時であつたから、冷静なふうなどはお作りになることができずにしおしおとした御様子をお見せになり、昔の話、今の話を弱々しい声であそばすのであつたが、

「今日か、明日かと思われるような重態でいて、しかも生き続けていることに油断をして、希望の出家も遂げないで亡<sup>な</sup>くなるようなことがあつてはと奮発をして実行したのですよ。こうなつても生命<sup>いのち</sup>がなければしたい仏勤めもできないでしょうが、まず仮にも一つの線を出ておいて、はげしいお勤めはできないでも念仏だけでもしておきたいと思

います。私のような者が今日生きているということはこの志だけは遂げたいという望みに燃えていたのを仏が憐あわれんでくださったのだと自分でもわかっているのに、まだお勤めらしいこともしていないのを仏に相済まなく思います」

御出家についての感想をこうお述べあそばしたのに続いて、

「女の子を幾人も残して行くことが気がかりです。その中で母も添っていない子で、だれに託しておけばよいかわからぬような子のために最も私は苦悶くもんしています」

と、仰せになった。正面からその問題をお出しにもならない御様子をお気の毒に六条院は思召おぼしめされた。お心の中でもその宮についていささかの好奇心も動いているのであるから、冷ややかにこのお話を聞き

流しておしまいになることができないのであった。

「ごもつともです。普通の家の娘以上に内親王のお後ろだてのないのは心細いものでございます。ごりつぱな儲君<sup>ちよくん</sup>として天下の輿望<sup>よぼう</sup>を負うておいでになる東宮もおいでになるのでございますから、あなた様から特にお心がかりに思召す方のことをお話にさえあそばされておけば、一事でもおろそかにあそばさないはずで、何も将来のことをそう御心配になることはなかりうと申しますものの、即位をなさいました場合にも天子は公の君ですから政はお心のままになりまして、個人<sup>まつりごと</sup>として女の御兄弟に親身のお世話をなされ、内親王が特別な御庇護をお受けになることはむずかしいでしょう。女の方のためにはやはり御結婚をなすって、離れることのできない関係による男の助力をお得に

なるのが安全な道と思われませんが、御信仰にもさわるほどの御心配が残るのでございましたら、ひそかに婿君を御選定しておかれましてはと存じます」

「私もそうは思うのですが、それもまたなかなか困難なことですよ。

昔の例を思ってもその時の天子の内親王がたにも配偶者をお選びになつて結婚をおさせになることも多かつたのですから、まして私のように出家までもする凋落ちようらくに傾いた者の子の配偶者はむずかしい。資格をしいて言いませんが、またどうでもよいとすべてを言ってしまうこともできなくて煩悶はんもんばかりを多くして、病気はいよいよ重るばかりだし、取り返せぬ月日もどんどんたつていくのですから気が気でもない。お気の毒な頼みですが、幼い内親王を一人、特別な御好意で預

かっただすって、だれでもあなたの鑑識にかなった人と縁組みをさせていたきたいと私はそのことをお話ししたかったのです。権中納言などの独身時代にその話を持ち出せばよかったなどと思うのです。

太政大臣に先を越せんされてうらやましく思われます」

と朱雀院は仰すざくせられた。

「中納言はまじめで忠良な良人おっとになりうるでしょうが、まだ位なども足りない若さですから、広く思いやりのある姫宮の御補佐としては役だちませんでしょう。失礼でございますが、私が深く愛してお世話を申し上げますれば、あなた様のお手もとにおられますのといいた変化もなく平和なお気持ちで暮らしになることができるであろうと存じますが、ただそれはこの年齢の私でございますから、中途でお別れ



することになろうという懸念が大きいのでございます」

こうお言いになって、六条院は女三にょさんの宮みやとの御結婚をお引き受けになつたのであつた。

夜になつたので御主人の院付きの高官も六条院に供奉ぐぶして参つた高官たちにも御饗応きやうおうの膳ぜんが出た。正式なものでなくお料理は精進物の風流な趣のあるもので、席にはお居間が用いられた。朱雀院のは塗り物でない浅香の懸盤かけばんの上で、鉢はちへ御飯を盛る仏家の式のものであつた。こうした昔に変わる光景に列席者は涙をこぼした。身にしむ気分の出た歌も人々によつて詠よまれたのであつたが省略しておく。夜がふけてから六条院はお帰りになつたのである。それぞれ等差のある纏頭てんとうを供奉の人々はいただいた。別当大納言はお送りをして六条院へまで来

た。

朱雀院は雪の降っていたこの日に起きておいでになったために、また風邪かぜをお引き添えになったのであるが、女三の宮の婚約が成り立つたことで御安心をあそばされた。

六条院も新しい御婚約についての責任感と、紫夫人との夫婦生活の形式が改められねばならぬことをお思いになる苦痛とがお心でいっしょになって煩悶はんもんをしておいでになった。朱雀院がそうした考えを持っておいでになるということは女王にようおうの耳にもはいつていたのであるが、そんなことにもなるまい、前斎院にあれば恋はしておられたが、しいて結婚も院はなさらなかったのであるからなどと思つて、そうした問題のありなしも問わずにいて、疑っていないのを御覧になると、

院は心苦しくて、何と思うであろう、自分のこの人に対する愛は少しも変わらないばかりでなく、そういうことになればいよいよ深くなるであろうが、その見きわめがつくまでに、この人は疑って自分自身を苦しめることであろうとお思いになると、お心が静かでありえない。今日になつてはもう二人の間に隔てというものは何一つ残さないことに馴<sup>な</sup>れた御夫妻であつたから、この話をすぐに話さずにおいでになるのも院は苦痛にされながらその夜はお寝<sup>やす</sup>みになった。

翌日はなお雪が降つて空も身にしむ色をしていた。六条院は紫の女王と来し方のこと、未来のことをしみじみと話しておいでになった。

「院の御病氣がお悪くて衰弱しておいでになるのを御見舞いになつて、いろいろと身にしむことが多かった。女三の宮のことではいまだに

御心配をしておられて、私へこんなことを仰せられた」

院はその方を託したいと朱雀院の仰せられた話をくわしくあそばされた。

「あまりにお気の毒なので御辞退ができなかったのだが、これをまた世間は<sup>おおぎようふいちよう</sup>大仰に吹聴をするだろうね。私はもう今はそうした若い人と新しく結婚するような興味はなくなっているのだから、最初人を介してお話の時は口実を設けてお断わり申ししていたのだが、直接お目にかかった際に、御親心というものがあまりに濃厚に見えて、冷淡に辞退をしてしまうことができなかったのですよ。郊外の寺へいよいよ院がおはいりになる時になってここへ迎えようと思う。味気ないこととあなたは思うでしょう。そのためにどんな苦しいことが一方に起こって

も、私があなを思うことは現在と少しも変わらないだろうから不快に思つてはいけませんよ。宮のためにはかえつて不幸なことだと私は知っているが、それも体面は作つてあげることを上手にしますよ。そして双方平和な心でいてもらえれば私はうれしいだろう」

などと言われるのであつた。ちよつとした恋愛問題を起こしても自身が侮辱されたように思う女王であつたから、どんな気がするだろうとあやぶみながら話されたのであつたが、夫人は非常に冷静なふうでいて、

「親としての御愛情から出ましたお頼みでございましょうね。私がか快になど思うわけはございません。あちらで私を失礼な女だとも、なぜ遠慮をしてどこへでも行つてしまわないかともおとがめにならなけ

れば、私は安心しております。お母様の女御にょごは私の叔母様おばでいらつしやるわけですから、その続き合いで私を大目に見てくださるでしうか」

と卑下した。

「あなたのそれほど寛大過ぎるのもなぜだろうとかえって私に不安の念が起こる。それはまあ冗談じょうだんだが。まあそんなふうにも見てあなたが許していてくれて、一方にもその心得でいてもらって、平和が得られれば私はいよいよあなたを尊敬するだろう。中傷する者があつて何を言おうともほんとうと思つてはいけませんよ。すべて噂うわさというものは、だれがためにするところがあつて言い出すというのでもなく、良いいことは言わずに、悪いことを言うのがおもしろくて言いふらさせる

ものだが、そんなことから意外な悲劇がかもされもするのだから、人の言葉に動揺を受けないで、ただなるがままになっているのがいいのです。まだ実現されもせぬうちから物思いをして私をむやみに恨むようなことをしないでくださいね」

こう院はおさとしになった。女王は言葉だけでなく心の中でも、こんなふうに天から降ってきたような話で、院としては御辞退のなされようもない問題に対して嫉妬しつとはすまい、言えばとてそのとおりになるものでもなく、成り立った話をお破りになることはないであろう、院のお心から発した恋でもないから、やめようもないのに、無益な物思いをしているような噂は立てられたくないと思った。継母ママははである式部しきぶき卿ようの宮の夫人が始終自分を誼のろうようなことを言っておいでになって、

左大将の結婚についても自分のせいでもあるように、曲がった恨みをかけておいでになるのであるから、この話を聞いた時に、詛いが成就したように思うことであろうなどと、穏やかな性質の夫人もこれくらいのこととは心の蔭かげでは思われたのであった。今になつてはもう幸福であることを疑わなかつた自分であつた。思い上がつて暮らした自分が今後はどんな屈辱に甘んじる女にならねばならぬかしれぬと紫の女王は愁うれいながらもとおおようにしていた。

春になつた。朱雀院すざくでは姫宮の六条院へおはいりになる準備がととのつた。今までの求婚者たちの失望したことは言うまでもない。帝みかども後宮にお入れになりたい思召おぼしめしを伝えようとしておいでになつたが、いよいよ今度のお話の決定したことを聞こし召されておやめになつ



た。六条院はこの春で四十歳におなりになるのであったから、内廷からの賀宴を挙行させるべきであると、帝も春の初めから御心みこころにかけさせられ、世間でも御賀を盛んにしたいと望む人の多いのを、院はお聞きになつて、昔から御自身のこととでたいそうな式などをするこのおきらいな方だったから話を片端から断わつておいでになつた。

正月の二十三日は子ねの日であつたが、左大将の夫人から若菜わか菜の賀をささげたいという申し出があつた。少し前まではまったく秘密にして用意されていたことで、六条院が御辞退をあそばされる間がなかったのであつた。目だたせないようにはしていたが、左大将家をもつてすることであつたから、玉鬘夫人たまかざらの六条院へ出て来る際の従者の列などはたいしたものであつた。南の御殿の西の離れ座敷に賀をお受けにな

る院のお席が作られたのである。屏風びょうぶも壁代かべしろの幕も皆新しい物で装しつら  
われた。形式をたいそうにせず院の御座に椅子いすは立てなかつた。地敷  
きの織物が四十枚敷かれ、褥しとね、脇息きょうそくなど今日の式場の装飾は皆左大将  
家からもたらした物であつて、趣味のよさできれいに整えられてあつ  
た。螺鈿らでんの置き棚だな二つへ院のお召し料の衣服箱四つを置いて、夏冬の  
装束、香壺こうご、薬の箱、お硯すずり、洗髪器ゆするつき、櫛くしの具の箱なども皆美術的な作  
品ばかりが選んであつた。御挿頭かざしの台は沈じんや紫檀したんの最上品が用いら  
れ、飾りの金属も持ち色をいろいろに使い分けてある上品な、そして  
派手はでなものであつた。玉鬘夫人は芸術的な才能のある人で、工芸品を  
院のために新しく作りそろえたすぐれたものである。そのほかのこと  
はきわだたせず質素に見せて実質のある賀宴をしたのであつた。参列

者を引見されるために客座敷へお出しになる時に玉鬘夫人と面会された。いろいろの過去の光景がお心に浮かんだことと思われる。院のお顔は若々しくおきれいで、四十の賀などは数え違いでないかと思われるほど艶<sup>えん</sup>で、賀を奉る夫人の養父でおありになるとも思われないのを見て、何年かを中に置いてお目にかかる玉鬘の尚侍は恥<sup>たまか</sup>ずかしく思いつながら以前どおりに親しいお話をした。尚侍の幼児がかわいい顔をしていた。玉鬘夫人は続いて生まれた子供などをお目にかけるのをはばかっていたが、良人<sup>おっと</sup>の左大將はこんな機会にでもお見せ申し上げておかねばお逢<sup>あ</sup>わせすることもできないからと言って、兄弟はほとんど同じほどの大きさで振り分け髪に直衣<sup>のうし</sup>を着せられて来ていたのである。

「過ぎた年月のことというものは、自身の心には長い気などはしないもので、やはり昔のままの若々しい心が改められないのですが、こうした孫たちを見せてもらうことでにわかに恥ずかしいまでに年齢としを考えさせられます。中納言にも子供ができているはずなのだが、うとい者に私をしているのかまだ見せませんよ。あなたがだれよりも先に数えてくださって年齢としの祝いをしてくださる子ねの日も、少し恨めしくないことはない。もう少し老いは忘れていたいのですがね」

と、院は仰せられた。玉鬘もますますきれいになって、重味というようなものも添ってきてりっぱな貴婦人と見えた。

若葉さす野辺のべの小松をひきつれてもとの岩根を祈る今日かな

こう大人おとなびた御挨拶あいさつをした。沈じんの木の四つの折敷おしきに若菜を形式的に  
だけ少し盛って出した。院は杯をお取りになつて、

小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき

などとお歌いになつた。高官たちは南の外座敷の席に着いた。式部  
卿の宮は参りにくく思召おぼしめしたのであるが、院から御招待をお受けに  
なつて、御舅しゅうとでいらせられながら賀宴に出ないことは含むことでもあ  
るようであるからとお思いになり、ずっと時間をおくらせておいでに  
なつた。以前の婿の左大將が御養女の婿として得意な色を見せて、賀  
宴の主催者になつてゐるのを御覧になる宮は、御不快なことであろう

とも思われたが、御孫である左大将家の長男次男は紫夫人の甥<sup>おい</sup>としても、主催者の子としても席上の用にいろいろと立ち働いていた。籠詰<sup>かご</sup>めの料理の付けられた枝が四十、折櫃<sup>おりびつ</sup>に入れられた物が四十、それらを中納言をはじめとして御親戚<sup>しんせき</sup>の若い役人たちが取り次いで御前へ持って出た。院の御前には沈<sup>じん</sup>の懸盤<sup>かけばん</sup>が四つ、優美な杯の台などがささげられた。朱雀院<sup>すざいく</sup>がまだ御全快あそばさないので、この御宴席で専門の音楽者は呼ばれなかった。楽器類のことは玉鬘夫人の実父の太政大臣が引き受けて名高いものばかりが集められてあつた。

「この世で六条院の賀宴のほかに、高尚<sup>こうしょう</sup>なもの集まってよい席というものはない筈なのだ」

と言って、大臣は当日の楽器を苦心して選んだ。それらで静かな音

樂の合奏があつた。和琴わごんはこの大臣の秘蔵して來た物で、かつてこの名手が熱心に弾ひいた樂器は諸人がかき立てにくく思うようであつたから、かたく辞退していた右衛門督うゑもんのかみにぜひにと弾ひくことを院がお求めになつたが、予想以上に巧みに名手の長男は弾いた。どう遺伝があるものとしても、こうまで父の芸を継ぐことは困難なものであるがとだれも感動を隠せずにいた。支那しなから伝わった弾き方をする樂器はかえつて学びやすいが、和琴はただ清搔すががきだけで他の樂器を統制していくものであるからむずかしい芸で、そしてまたおもしろいものなのである。右衛門督の爪音つまおとはよく響いた。一つのほうの和琴は父の大臣が絃いともゆるく、柱じも低くおろして、余韻を重くして、弾いていた。子息のははなやかに音ねがたつて、甘美な愛嬌あいぎようがあると聞こえた。これほど上じよ

手であるという評判はなかつたのであるがと親王がたも驚いておいで  
になつた。琴は兵部卿の宮があそばされた。この琴は宮中の宜陽殿に  
納めておかれた御物であつて、どの時代にも第一の名のあつた楽器で  
あつたが、故院の御代の末ごろに御長皇女の一品の宮が琴を好んでお  
弾きになつたので御下賜あそばされたのを、今日の賀宴のために太政  
大臣が拝借してきたのである。この楽器によつて御父帝の御時のこ  
と、また御姉宮に賜わつた時のことが思召されて六条院はことさら身  
に沁んで音色に聞き入つておいでになつた。兵部卿の宮も酔い泣きが  
とめられない御様子であつた。そして院の御意をお伺いになつた上琴  
を御前へ移された。今夜の御気分からお辞みになることはできずに院  
は珍しい曲を一つだけお弾きになつた。そんなこともあつて大がかり



な演奏ではないがおもしろい音楽の夜になったのである。階段きざはしの所に声のよい若い殿上人たちの集められたのが、器楽のあとを歌曲に受け、「青柳」の歌われたころはもうねぐら埒に帰っていたうぐいす鶯も驚くほど派手はでなものになった。主催する人は別にあつた宴会ではあるが、院のほうでも纏頭の御用意があつて出された。

夜明けに尚侍は自邸へ帰るのであつた。院からのお贈り物があつた。

「私はもう世の中から離れた気にもなつて、勝手な生活をしていますから、たつて行く月日もわからないのだが、こんなに年を数えてきてくだすつたことで、老いが急に来たような心細さが感ぜられます。おりおりはどんな老人になつたかとその時その時を見比べに来てくださ

い。老人でいながら自由に行動のできない窮屈な身の上ということに  
ともかくもなっているのですから、自分の思うとおりに御訪問などが  
できず、お目にかかる機会の少ないのを残念に思います」

などと院はお言いになって、身にしむことも、恋しい日のこともお  
思いにならないのではないのに、玉鬘が<sup>たまかずら</sup>たまたま来ても早く去って行  
こうとするのを物足らず思召すようであつた。玉鬘の尚侍も実父には  
肉親としての愛は持っているが、院のこまやかだつた御愛情に対して  
は、年月に添つて感謝の心が深くなるばかりであつた。今日の境遇の  
得られたのも院の恩恵であると思つていた。

二月の十幾日に朱雀院の女三の<sup>すざく</sup>宮<sup>みや</sup>は六条院へおはいりになるので  
あつた。六条院でもその準備がされて、若菜の賀に使用された寢殿の

西の離れに帳台を立て、そこに属した一二の対の屋、わたどの渡殿へかけて女房の部屋へやも割り当てた華麗な設けができていた。宮中へはいる人の形式が取られて、朱雀院からお道具類は運び込まれた。その夜の儀装の列ははなやかなものであった。供奉者ぐぶには高官も多数に混じっていた。姫宮を主公として結婚をしたいと望んだ大納言も失敗した恨みの涙を飲みながらお付きして来た。お車の寄せられた所へ六条院が出てお行きになって、宮をお抱きおろしになったことなどは新例であった。天子でおいでになるのではないから入内じゅだいの式とも違い、親王夫人の入輿にゅうよとも違ったものである。

三日の間は御舅しゅうとの院のほうからも、また主人の院からも派手はでな伺候者へのおもてなしがあった。紫の女王によおうもこうした雰囲気ふんいきの中にいては

寂しい気のすることであろうと思われた。夫人は静かにながめていながらも、院との間柄が不安なものになるうとは思わないのであるが、だれよりも愛される妻として動きのない地位をこれまで持った人も、若くて将来の長い内親王が競争者におなりになったのであるから、次第に自分が自分をはずかしめていく気がしなくてもない心を、おさえ、おおように姫宮の移っておいでになる前の仕度したくなども院とごいっしょになってしたような可憐かれんな態度に院は感激しておいでになった。女三の宮はかねて話のあったようにまだきわめて小さくて、幼い人といってもあまりにまでお子供らしいのである。紫の女王を二条の院へお迎えになった時と院は思い比べて御覧になっても、その時の女王は才気が見えて、相手にしていておもしろい少女おとめであつたのに、これは

単に子供らしいというのに尽きる方であつたから、これもいいである、自尊心の多過ぎず出過ぎたことのできない点だけが安心である、院はつとめて善意で見ようとされながらも、あまりに言いがない新婦であるとお歎なげかれになつた。

三日の間は続いてそちらへおいでになるのを、今日までそうしたことに馴なれぬ女王であつたから、忍ぼうとしても底から底から寂しさばかりが湧わいてきた。新婚時代の新郎の衣服として宮のほうへおいでになる院のお召し物へ女房に命じて薰香たきものをたきしめさせながら、自身は物思いにとらわれている様子が非常に美しく感ぜられた。何事があつても自分はもう一人の妻を持つべきではなかつたのである。この問題だけを謝絶しきれずに締まりがなく受け入れた自分の弱さからこんな

悲しい思いをすることにもなつたと、院は御自身の心が恨めしくばかりおなりになつて、涙ぐんで、

「もう一晩だけは世間並みの義理を私に立てさせてやると思つて、行くのを許してください。今日からあとに続けてあちらへばかり行くよなことをする私であつたなら、私自身がまず自身を軽蔑するでしようね。しかしまた院がどうお思ひになることだか」

と、お言ひになりながら煩悶はんもんをされる様子がお氣の毒であつた。夫人は少し微笑をして、

「それ御覧なさいませ。御自身のお心だつてお決まりにならないのでしよう。ですもの、道理のあるのが強味ともいつておられませんわ」

絶望的にこう女王に言われては、恥ずかしくさえ院はお思われに

なつて、ほおづえ頬杖を突きながらうつとりと横になつておいでになつた。紫の女王はすずり硯を引き寄せて無駄むだ書きを始めていた。

目に近くうつれば変はる世の中を行く末遠く頼みけるかな

と書き、またそうした意味の古歌なども書かれていく紙を、院は手に取つてお読みになり夫人の気持ちをお憐あわれみになつた。

命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬ中の契りを

こんな歌を書いて、急に立つて行こうともされないのを見て、夫人

が、

「おそくなつては済みませんことですよ」

と催促したのを機会に、柔らかな直衣のうしの、艶えんに薰香たきものの香をしませたものに着かえて院が出てお行きになるのを見ている女王の心は平静でありえまいと思われた。これまでにさらに新婦を得ようとされるらしい気けぶりはあつても、いよいよことが進行しそうな時に反省しておしまいになる院でおありになつたから、ただもう何でもなく順調に幸福が続いていくとばかり信じていた末に、世間のものにも自分の位置をあやぶませるようなことが湧わいてきた。永久に不変なものなどはないこうしたこの世ではまたどんな運命に自分は遭遇するかもしれないと女王は思うようになった。表面にこの動揺した気持ちは見せないの



あるが、女房たちも、

「意外なことになるものですね。ほかの奥様がたはおいでになつてもこちらの奥様の競争者などという自信を持つ方もなくて、御遠慮をしていらっしゃるから無事だったのですが、こんなふうにはこの奥様をすら眼中にお置きあそばさないような方が出ていらつしてはどうなることでしょう。だれよりも優越性のある方に劣等者の役はお勤まりにはならないでしょう。そしてまたあちらから申せば、何でもないことに神経をおたかぶらせになるようなこともないとは言われませんか、そこで苦しい争闘が起こつて奥様は御苦勞をなさるでしょうね」

などと語つて歎なげいていたのであつたが、少しも氣にせぬふうで、機きげ嫌んよく夫人は皆と話をして夜がふけるまで座敷に出ていたが、女房た

ちの中にあるそうした空気が外へ知れては醜いように思ってしまった。

「院には何人もの女性が侍しておられるのだけれど、理想的な御配偶とお認めになるはなやかな身分の人はないとお思いになって、物足らず思召していらっしゃったのだから、宮様がおいでになってこれで完全になったのよ。私はまだ子供の気持ちがなくなっていないと見えて、いっしょに遊んで楽しく暮らしたくばかり思っているのに、皆が私の気持ちを<sup>そんたく</sup>忖度して面倒な関係にしまわなかと心配よ。自分と同じほどの人とか、もっと下の人とかには、あの人が自分より多く愛されることは不愉快だというような気持ちは自然起こるものだけだ、あちらは高貴な方で、お気の毒な事情でこうしておいでになったのだから、その方に悪くお思われしたくないと私は努めているのよ」

中將とか中務とかいふ女房は目を見合せて、

「あまりに思いやりがおありになり過ぎるようね」

ともひそかに言っていた。この人たちは若いころに院の御愛人であつたが、須磨へおいでになつた留守中から夫人付きになつていて、皆女王を愛していた。他の夫人の中には、どんなお気持ちになさることでしよう、愛されない者のあきらめが平生からできている自分らとは違つておいでになつたのであるからという意味の慰問をする人もあるので、女王はそんな同情をされることがかえつて自分には苦痛になる。無常のこの世にいてそう夫婦愛に執着している自分でもないものと思つていた。あまりに長く寝ずにいるのも人が異様に思うであろうと我と心にとがめられて、帳台へはいると、女房は夜着を掛けてくれ

た。人から憐あわれまれているとおりに確かに自分は寂しい、自分の嘗なめて  
いるものは苦にがいほかの味のあるものではないと夫人は思ったが、須磨すま  
へ源氏の君の行つたころを思い出して遠くに隔たつていようとも同じ  
世界に生きておいでになることで心を慰めようとそのころはした、自  
分がどんなにみじめであるかは心で問題にせず源氏の君のせめて健在  
でいることだけを喜んだではないか、その時の悲しみがもとで源氏の  
君なり自分なりが死んでいたとしたら、それからのち今日までの幸福  
は享うけられなかったのであるともまた思い直されもするのであった。  
外には風の吹いている夜の冷えて急には眠れない。近くに寝ている女  
房が寝返りの音を聞いて気をもむことがあるかもしれぬと思うこと  
で、床の中でじっとしているのもまた女王に苦しいことであつた。一

番鶏どりの声も身に沁しんで聞かれた。恨んでばかりいるのでもなかったが、夫人のこんなに苦しんでいたことのあちらへ通じたのか、院は夫人の夢を御覧になった。目がさめて胸騒ぎのあそばされる院は鶏の鳴くのを聞いておいでになって、その声が終わるとすぐに宮の御殿をお出になるのであったが、お若い宮であるために乳母たちが近くにやすんでいて、その人たちが院の妻戸をあけて外へ出られるのをお見送りました。夜明け前のしばらくだけことさらに暗くなる時間で、わずかな雪の光で院のお姿がその人たちに見えるのである。院のお服から発散された香気がまだあとに濃く漂っているのに乳母たちは気づいて「春の夜の闇やみはあやなし梅の花」などとも古歌が思わず口に上りもした。院は所々にたまった雪の色も砂子の白さと差別のつきにくい庭をなが

めながら対のほうへ向いてお歩きになりながらなお「残れる雪」と口ずさんでおいでになった。対の格子をおたたきになったが、久しく夜明けの帰りなどをあそばされなかったのであったから、女房たちはくやしい気になってしばらく寝入ったふうをしていてやっとあとに格子をお上げした。

「長く外に待たされて、身体からだが冷え通る気がしたのも、それは私の心が済まぬとあなたを恐れる内部のせいで、女房に罪はなかったのかも  
しれない」

と、院はお言いになりながら、夫人の夜着を引きあけて御覧になると、少し涙で濡ぬれている下の単衣ひとえの袖を隠そでそうとする様子が美しく心へお受け取られになった。しかも打ち解けぬものが夫人の心にあつて

品よく艶えんな趣なのである。最高の貴女きじよといつても完全にものとのわぬ憾うらみがあるのにと院は新婦の宮と紫の女王を心にくらべておいでになった。二人が来た道を振り返ってお話しになりながら、恨みの解けぬふうな夫人をなだめて翌日はずっとそばを離れずにおいでになったあとでは、夜になつても宮のほうへお行きになれずに手紙だけをお送りになった。

今暁けさの雪に健康をそこねて苦しい気がしますから、気楽な所で養生をしようと思います。

というのであつた。乳母めのとの、

「そのとおりに申し上げました」

という言葉を使い聞いて来た。平凡な返事であると院は思いに

なつた。朱雀院すざくがどうお思いになるかということが気がかりであるから、当分はあちらを立てるようになしておきたいと院はお思いになつても、実行に伴う苦痛が堪えがたく、なんということであろうと悲しんでおいでになつた。夫人も、

「あちらへ御同情心の欠けたことでございますよ」

と言いつつ自分の立場を苦しんでいた。次の日はこれまでのとおり、に自室でお目ざめになつて、宮の御殿へ手紙をお書きになるのであつた。晴れがましくは少しもお思いにならぬ相手ではあつたが、筆を選んで白い紙へ、

中道を隔つるほどはなけれども心乱るる今朝けさのあは雪



と書いて、梅の枝へお付けになった。侍をお呼びになつて、

「西の渡殿のほうから参つて差し上げるように」

とお命じになった。そして院はそのまま縁に近い座敷で庭をながめておいでになった。白い服をお召しになつて、梅の枝の残りを手にまさぐつておいでになるのである。仲間を待つ雪がほのかに白く残っている上に新しい雪も散っていた。若やかな声で鶯が近いところの紅梅の梢で鳴くのがお耳にはいつて、「袖こそ匂へ」(折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯ぞ啼く)と口ずさんで、花をお持ちになつた手を袖に引き入れながら、御簾を掲げて外を見ておいでになる姿は、ゆめにも院などという御位の方とは見えぬ若々しさである。寝殿から来るお返事が手間どるふうであつたから、院は居室のほうへお

いでになつて夫人に梅の花をお見せになつた。

「花であればこれだけの香気を持ちたいものですね。桜の花にこの香かおりがあればその他の花は皆捨ててしまふでしょうね。こればかりがよくなつて」

「この花もただ今でこそ唯一の花で、梅はよいものだと思われるのですよ。春の百花の盛りにほかのものと比較したらどうでしょうかしら」

などと夫人が言っている時に、宮のお返事が来た。紅あかい薄うす様ように包まれたお文ふみが目にしたつので院ははつとお思ひになつた。幼稚な宮の手跡は当分女王に隠しておきたい。この人に隔て心はないがさげすむ思ひをさせることがあつては宮の身分に対して濟まないと院はお思ひにな

るのであるが、隠しておしまいになることも夫人の不快がることであろうからと、半分は見せてもよいというようにお拡<sup>ひろ</sup>げになった文<sup>ふみ</sup>を、女王は横目に見ながら横たわっていた。

はかなくて上<sup>うは</sup>の空にぞ消えぬべき風に漂ふ春のあは雪

文字は実際幼稚なふうであつた。十五にもおなりになればこんなものではないはずであるがと目にとまらぬことでもなかったが、見ぬふりをしてしまった。他の女性のことであれば批評的な言葉も院は口にせられたであろうが御身分に敬意をお払いになつて、

「あなたは安心していてよいと思いなさいよ」

とだけ夫人に言っておいでになった。

今日は昼間に宮のほうへおいでになった。特にきれいに化粧をお施しになった院のお美しさに、この日はじめて近づいた女房は興奮していた。老いた女房などの中には、なんといっても幸福な奥様はあちらのお一方だけで、宮は御不快な目にもおあいになるのであると、こんなことを思う者もあった。姫宮は可憐で、たいそうなお居間の装飾などとは調和のとれぬ何でもない無邪気な少女で、お召し物の中おとめにうずもれておしまいになったような小柄な姿を持っておいでになるのである。格別恥ずかしがってもおいでにならない。人見知りをせぬ子供すざくのようであつかいやすい気を院はお覚えになった。朱雀院は重い学問きわのほうは奥を究めておいでになると言われておいでにならないが、芸

術的な趣味の豊かな方としてすぐれておいでになりながら、どうして御愛子をこう凡庸に思われるまでの女にお育てになったかと院は残念な気もあそばされたのであるが、御愛情が起こらないのでもなかった。院のお言いになるままになってなよなよとおとなしい。お返辞なども習っておありになることだけは子供らしく皆言っておしまいに なって、自発的には何もおできにならぬらしい。昔の自分であれば厭<sup>いや</sup> 気のさしてしまう相手であろうが、今日になつては完全なものは求め ても得がたい、足らぬところを心で補つて平凡なものに満足すべきで あるという教訓を、多くの経験から得てしまった自分であるから、こ れをすら妻の一人と見ることができ。第三者は自分のことを好適な 配偶を得たと見ることであろうとお考えになると、離れる日もなく見

ておいでになつた紫の女王によおうの価値が今になつてよくおわかりになる気がされて、御自身のお与えになつた教育の成功したことをお認めにならずにはおられなかつた。ただ一夜別れておいでになる翌朝の心はその人の恋しさに満たされ、しばらくして逢いうる時間がもどかしくお思われになつて、院の愛はその人へばかり傾いていった。なぜこんなにまで思うのであろうかと院は御自身をお疑いになるほどであつた。

朱雀院はそのうちに御寺みでらへお移りになるのであつて、このころは御親心のこもつたお手紙をたびたび六条院へつかわされた。姫宮のことをお頼みになるお言葉とともに、自分がどう思ふかと心にお置きになるようなことはないようにして、ともかくもお心にかけていくのであればよいという意味の仰せがあるのであつた。そうは仰せられながら

も御幼稚な宮がお氣がかりでならぬ御様子が見えるお文ふみであつた。紫夫人へもお手紙があつた。

幼い娘が、何を理解することもまだできぬまままでそちらへ行つておりますが、邪氣のないものとしてお許しになつてお世話をおやきください。あなたには縁故がないわけでもないのですから。

そむきにしこの世に残る心こそ入る山みちの絆ほだしなりけれ

親の心の闇やみを隠そうともしませんでこの手紙を差し上げるのもはばかり多く思われます。

というのであつた。院も御覧になつて、

「御同情すべきお手紙ですから、あなたからも丁寧にお返事を書いておあげなさい」

こうお言いになって、そのお使いへは女房を出して酒をお勧めになった。

「どう書いてよろしいのかわかりません。お返事がいたしにくうございます」

と女王は言っていたが、言葉を飾る必要のある場合のお返事でもなかったから、ただ感じただけを、

そむく世のうしろめたくばさがたき絆ほだしを強しひてかけなはなれそ



こんな歌にして書いた。女の装束に細長衣ほそながを添えた纏頭てんとうをお使いへ出した。女王の書いたお返事の字のりっぱであるのを院は御覧になつて、こんなにも物事の整つた夫人もある六条院へ、一人の夫人となつて幼稚な姫宮が行つておられることを心苦しく思召した。

御出家の際に悲しがった女御によご、更衣こういは院が御寺みでらへお移りになることによつて、いよいよ散り散りにそれぞれの自邸へ帰るのであつたが気の毒な人ばかりであつた。尚侍ないしのかみはお崩れかくになつた皇太后がお住みになつた二条の宮へはいつて住むことになつた。姫宮を心がかりに思召されたのに次いでは尚侍のことを院の帝は顧みがちにされた。

尼になりたい希望を前尚侍は持っていたが、この際それを実行するのは、人を慕つて出家をすることで、悟つた人のすることでないとい院

は御忠告をあそばして、ひたすら御自身の御寺の仏像の製作を急がせておいでになった。

六条院はこのおぼろづきよ朧月夜の前尚侍と飽かぬ別れをあそばされたまま、今もその時に続いて長い恋をしておいでになり、どんな機会にまた逢うことができよう、今一度は逢つて、その時の血のにじむほど苦しかった心をその人に告げたいと思召されるのであつたが、双方とも世間の評のはばかりれる身の上でもおありになつて、女のためにも重い傷手いたでを負わせたあの騒動をお思になると、積極的な御行動は取れないで院は忍んでおいでになったのであるが、朱雀院すざくともお別れして閑散な独身生活にはいつているそのこと自身がお心を惹ひいて、お逢いになりたくてならないのであつた。あるまじいこととはお思ひになりなが

ら、ただ友情による手紙と見せて、忘れえぬ熱情をお洩らしになることがたびたびになった。もう青春の男女のように、危険がる必要もないと思つては時々お返事も前尚侍は出した。昔に増してあらゆる点の完成されつつある跡の見える朧月夜の君の手紙がいつその魅力になつて、昔の中納言の君の所へも、二人の逢う道を開かせようとすると手紙を院は常に書いておいでになつた。その女の兄である前和泉守いづみのかみをお呼び寄せになつては、若い日へお歸りになつたような相談をされた。

「取り次ぎをもつて話をするようなことでなく、そして直接といつても物越しでいいのだが話さねばならぬ用が私にあるのだ。尚侍の承諾を得るようになしてくれれば、私はそつと訪ねて行く。今はもう絶対に

そんなこともできない身の上になっている私が、そうしようと思うのだから、あちらでも秘密にしていただけだろうと安心はしている」

そのお話を中納言の君から聞いた時に、尚侍は、

「それは必要のない会見よ。私はもうあの時のような幼稚な心で人生を見ていない。昔から真実の欠けた愛しか私には持つてくださらなかった方の御誘惑などに今さらかからない。お気の毒な御生活に法皇様をお置きして、あの方とする昔の話など私にはない。お言葉どおり秘密にはするとしても私自身の心に恥ずかしいことではないか」

と歎息たんそくして、なおそういうことは思いもよらぬことであるというお返事ばかりをしていた。すべてのものを無視して、苦しい中で愛し合った二人ではないか、出家をあそばされた院に対してやましいこと

ではあるが、かつてなかったことではない関係なのだから、今になって清浄がっても昔の浮き名をあの人に取り返すことはできないのだと、こう院は思いになって、にわかにかこの和泉守を案内役として朧月夜の尚侍の二条の宮を訪ねる決心を院はあそばされたのであった。

夫人の女王へは、

「東の院にいる常陸ひたちの宮の女王がずっと病気をしておられるのですが、ここの取り込みに紛れて見舞ってあげなかったのがかわいそうなのだが、昼間は人目に立ってよろしくないから夜になってから出かけてみようと思います。だれにも知らせないことだからそのつもりにしておくのですよ」

と、お言いになって、院は外出の化粧におかかりになったが、ただ

事とは思われなかった。平生はそんなにしてお行きになる所ではないのであるから夫人は不審をいだいたが、思い合わされることもないではないのを、女三によさんの宮みやがおいでになってからは、以前のように思うことをすぐに言う習慣も女王は改めていて、素知らぬふうを作っているのであった。

この日は寢殿へもお行きにならないでただ手紙をお書きかわしに  
なっただけである。熱心に薰香たきものの香を袖そでにつけて、院は日の暮れるのを待っておいでになった。そしてきわめて親しい人を四、五人だけお  
つれになり、昔の微行しのびあるきに用いられた簡単な網代車あじろぐるまでお出かけになっ  
た。

六条院のおいでになったことが伝えられると、

「どうしてでしょう。私のお返事をどう聞き違えて申し上げたのだらう」

尚侍は機嫌きげんを悪くしたが、

「いいかげんな口実を作りましてお帰しいたすことなどはもったいないことでございましょう」

と中納言の君は言つて、無理な計らいまでして院を座敷へ御案内してしまった。院は見舞いの挨拶あいさつなどをお取り次がせになったあとで、「ただここに近い所へまで出てくださつて、物越しでもお話しくださいますせんか。今日はもう昔のような不都合なことをする心を持っていますせんから」

こう切に仰せられるので、尚侍はひどく歎息たんそくをしながら膝行いざつて出

た。だからこの人は軽率なのであると、満足を感じながらも院は批評をしておいでになった。これは二人にとって絶えて久しい場面であった。遠い世の思い出が女の心によみがえらないことでもないのである。東の対であつた。東南の端の座敷に院はおいでになって、隣室の尚侍のいる所との間の襖子からかみには懸金かねがねがしてあつた。

「何だか若者としての御待遇を受けているようで、これでは心が落ち着かないではありませんか。あれからどれだけの年月、日は幾つたつということまでも忘れない私としては、あなたのこの冷たさが恨めしく思われてなりませんよ」

と、院はお恨みになった。夜はふけにふけてゆく。池の鴛鴦おしどりの声な  
どが哀れに聞こえて、しめつぽく人けの少ない宮の中の空氣が身にお



感じられになり、人生はこんなに早く変わってしまふものかと昔の栄華の跡の邸やしきが思われになると、女の心を動かそうとして嘘泣うそきをした平仲へいちゆうではなくて真実の涙のこぼれるのを覚えになった。昔に変わってあせらず老成なふうに恋を説きながら、

「これはいつまでもこのままにしておくことになるのですか」と言つて、襖子を引き動かしたまうのであつた。

年月を中に隔あふさかて逢坂のさもせきがたく落つる涙か

院がこうお言いになつても、

涙のみせきとめがたき清水しみづにて行き逢ふ道は早く絶えにき

というようなかけ離れた返辞を女はするにすぎなかつたが、昔を思つてはだれが原因になつてこの方は遠い国に漂泊さすらつておいでになつたか、一人で罪をお負いになつたこの方に、冷たい賢がつた女にだけなつて逢つていて済むだろうかと朧月夜おぼろづきよないしのかみの尚侍の心は弱く傾いていつた。もとから重厚な所の少ない性質のこの人は、源氏の君から離れていた年月の間昔の軽率を後悔していたし、清算のできた気にもなつていたのであるが、昔のおりなような夜が眼前に現われてきて、その時と今の間にあつた時がにわかに短縮された気のするままに、初めの態度は取り続けられなくなつた。

やはり最も艶えんな貴女きじよとしてなお若やかな尚侍を院は御覧になることができたのであった。世に對し、人に對してはばかり煩悶はんもんが見えて歎たん息そくをしがちな尚侍を、今初めて得た恋人よりも珍しくお思いになり、海のような愛の湧わくのを院はお覚えになった。夜の明けていくのが惜しまれて院は歸つて行く気が起こらない。朝ぼらけの艶な空からは小鳥の声がうららかに聞こえてきた。花は皆散つた春の暮れで、浅緑にかすんだ庭の木立ちをおながめになつて、この家で昔藤花とうかの宴があつたのはちょうどこのころのことであつたと院はみずからお言いになったことから、昔と今の間の長いことも考えられ、青春の日が恋しく、現在のことが身に沁しんでお思われになつた。中納言の君がお見送りをするために妻戸をあけてすわっている所へ、いったん外へおいでに

なつた院が歸つて来られて、

「この藤ふじと私は深い因縁のある氣がする。どんなにこの花は私の心を惹ひくか知っていますか。私はここを去つて行くことができないよ」

こうお私語さごとやきになつたままで、なお花をながめて立ち去ろうとはなされないのであつた。山から出た日のはなやかな光が院のお姿にさして目もくらむほど美しい。この昔にもまさつた御風采ふうさいを長く見ることでできなかった尚侍が見て、心の動いていけないわけではないのである。過失のあつたあとでは後宮に侍してはいても、表きざきだつた后の位には上れない運命を負つた自分のために、姉君の皇太后はどんなに御苦労をなすつたことか、あの事件を起こして永久にぬぐえない悪名までも取るにいたつた因縁の深い源氏の君であるなどとも尚侍は思つてい

た。名残なごりの尽きぬ会見はこれきりのことにさせたくないことではあるが、今日の六条院が恋しのびの微行あるきなどを書いて軽々しくあそばされるものでもないと思われた。院はこの邸やしきにおける人目も恐ろしく思召おぼしめされたし、日が昇のぼっていくのにせきたてられるお気持ちも覚えておいでになった。廊の戸口の下へ車が着けられて、供の人たちもひそかなお促し声もたてた。院は庭にいた者に長くしだれた藤の花を一枝お折らせになった。

沈みしも忘れぬものを懲りずまに身も投げつべき宿の藤波

と歌いながら院はお悩ましいふうで戸口によりかかっておいでにな

るのを、中納言の君はお気の毒に思っていた。尚侍は再び作られた関係を恥じて思い乱れているのであったが、やはり恋しく思う心はどうすることもできないのである。

身を投げん淵ふちもまことの淵ならで懸かけじやささらに懲りずまの波

と女は言った。青年がするような行動を院は御自身も肯定できなくお思いになるのであるが、女の情熱の冷却してはいないことがうれしくて、またの会合を遂げうるようによく語っておゆきになった。昔も多くの中のすぐれた志で愛しておいになりながら、やむなくお別れになった仲に、この一夜があつたあとのお心はその人へ強くお惹ひかれ

にならぬわけもない。

院は非常に静かに忍んで自室へおはいりになった。こうした女の所からのお帰り姿を見て、相手は尚侍あたりであろうと、夫人には想像されるのであったが、気のつかぬふうをしていた。かえって妬<sup>ねた</sup>みを表へ出すことよりもこれを院は苦しくお思いになつて、なぜこうまで妻を冷淡にあつかったのであらうと歎息がされ、以前にまさった熱情をもつて永久に変わらぬ愛を語らうとあそばされるのに言葉を尽くしておいでになった。尚侍との間に復活させた情事は洩<sup>も</sup>らすべき性質のものではないのであるが、昔のこともくわしく知っている女王<sup>によおう</sup>であつたから、今度のことも真実のことまではお言いにならなかつたが、「物越しでやつと逢ってもらつただけでは心が残つてならない。人目

を上手に繕じょうずつてもう一度だけは逢いたい人だ」

とくらいにお話しになった。女王は笑って、

「お若返りにばかりなりますわね。昔を今にまた新しくお加えになつては、いよいよ私の影は薄くばかりなります」

と言いながらも、涙ぐんだ目をしているのが可憐かれんであつた。

「いつもそんなふうに、寂しそうにばかりあなたがするから、私はたまらなく苦しくなる。もっと荒削りに、私を打つとか捻ひねるとかして懲らしてくれたらどうですか。あなたにそうした水くさい態度をとらせるようには暮らして来なかつたはずだが、妙にあなたは変わってしまったね」

などとも言つて、機嫌きげんをお取りになるうちには前夜の真相も打ちあ



けて話しておしまいになることになった。姫宮のほうへお出かけにならずに、夫人をなだめるのに終日かかっておいでになった。それを宮は何ともお思いにならないのであるが、乳母たちだけは不快がつていろいろと言っていた。嫉妬しつとをお持ちになる傾向が宮にもあれば院はまして苦しい立場になるのであるが、おっとりとした少女おとめの宮を、人形のように気楽にお扱いになることはできるのであった。

東宮へ上がっておいでになる桐壺きりつぼの方は退出を長く東宮がお許しにならぬので、姫君時代の自由が恋しく思われる若い心にはこれを苦しくばかり思うのであった。夏ごろになっては健康もすぐれなくなったのであるが、なおも帰るお許しがないので困っていた。これは妊娠であつたのである。まだ十四、五の小さい人であつたから、この徴候を

見てだれもだれも危険がった。やつとのことでお許しが下がって帰邸することになった。女三の宮のおいになる寢殿の東側になった座敷のほうに桐壺の方の一時の住居すまいが設けられたのである。明石夫人あかしも共に六条院へ帰った。光る未来のある桐壺の方の身に添って進退する実母夫人は幸運に恵まれた人と見えた。紫夫人はそちらへ行つて桐壺の方に逢おうとして、

「このついでに中の戸を通りまして姫宮へ御挨拶あいさつをいたしましょう。前からそう思っていたのですが機会がなかったのですもの。わざわざ伺うのもきまりが悪かったのですが、こんな時だと自然なことに見えていいと思います」

と院へ御相談をした。院は微笑をされながら、

「結構ですよ。まだ子供なのですから、よくいろんなことを教えておあげなさい」

と御同意をあそばされた。宮様よりも明石夫人という聡明な女に逢うことで夫人は晴れがましく思い、髪も洗い、粧よそおいに念を入れた女王の美はこれに準じてよい人もないであろうと思われた。

院は宮のほうへおいでになって、

「今日の夕方対のほうにいる人が淑景舎を訪ねに来るついでにここへも来て、あなたと御交際の道を開きたいように言っていましたから、お許しになって話してごらんなさい。善良な性質の人ですよ。まだ若々しくてあなたの遊び相手もできそうですよ」

とお語りになった。

「恥ずかしいでしょうね。どんなお話をすればいいのでしょうか」

とおおように宮は言っておられる。

「人にする返辞は先方の話次第で出てくるものです。ただ好意を持つてお逢いにならないではいけませんよ」

院はこまごまと御注意をされた。院は御両妻の間が平和であるように祈っておいでになるのである。あまりにたあいのない子供らしさを紫の女王に発見されることは、御自身としても恥ずかしいことにお思ひになるのであるが、夫人が望んでいることをとめるのもよろしくないとお考えになったのである。

紫の女王は内親王である良人おっとの一人の妻の所へ伺候することになった自分をあわれ憐んだ。二十年同棲どうせいした自分より上の夫人は六条院にあつて

はならないのであるが、少女時代から養われて来たために、自分は軽侮してよいものと見られて、良人は高貴な新妻をお迎えしたものであらうと思うと寂しかった。手習いに字を書く時も、棄婦の歌、閨怨の歌が多く筆に上ることによつて、自分はこうした物思ひをしているのかとみずから驚く女王であつた。院は自室のほうへお歸りになつた。

あちらで女三の宮、桐壺の方などを御覧になつて、それぞれ異なつた美貌に目を楽しませておいでになつたあとで、始終見馴れておいでになる夫人の美から受ける刺激は弱いはずで、それに比べてきわだつ感じをお受けになることもなからうと思われるが、なお第一の嬋妍たる美人はこれであると院はこの時驚歎しておいでになつた。気高さ、貴女らしさが十分備わつた上にはなやかで明るく愛嬌があつて、艶な姿

の盛りと見えた。去年より今年は美しく昨日より今日が珍しく見えて、飽くことも見て倦むことも知らぬ人であつた。どうしてこんなに欠点なく生まれた人だろうかと院はお思いになつた。手習いに書いた紙を夫人が硯すずりの下へ隠したのを、院はお見つけになつて引き出してお読みになつた。字は専門家風に上手じょうずのではなく、貴女らしい美しさを多く含んだものである。

身に近く秋や来ぬらん見るままに青葉の山もうつろひにけり

と書かれてある所へ院のお目はとまつた。

水鳥の青羽は色も変はらぬを萩はぎの下こそけしきことなれ

など横へ書き添えておいでになった。何かの場合ごとに今日の夫人の懊惱おうれうする心の端は見えても、さりげなくおさえている心持ちに院は感謝しておいでになるのであった。今夜はどちらとも離れていてよい暇な時であったから、朧月夜おぼろづきよの君の二条邸へ院は微行でお出かけになった。あるまじいことであるとお思い返しになろうとしても、おさえきれぬ気持ちがあったのである。

東宮の淑景舎しげいしやの方は実母よりも紫夫人を慕っていた。美しく成人した継娘ままむすめを女王は真実の親に変わらぬ心で愛した。なつかしく語り合ったあとで中の戸をあけて、宮のお座敷へ行き、はじめて女三にょさんの宮みやに御

面会した。ただ少女とお見えになるだけの宮様に女王は好感が持たれて、軽い気持ちにもなり年長の人らしく、保護者らしいふうにものを言って、宮の母君と自身の血の続きを語ろうとして、中納言の乳母めのとと  
いうのをそばへ呼んで言った。

「さかのぼって言いますとそうなのですね。私の父の宮とお母様は御兄弟なのです。ですからもったいないことですが親しく思召おぼしめしていた  
だきたいと申し上げたかったのですが、機会がございませんでね。こ  
れからはお心安く思召して、私どもの住んでおりますほうへもお遊び  
においでくださいまして、気のつきませんことがございまして、御注  
意をいただけましたらうれしく存じます」

中納言の乳母が、



「お母様にもお死に別れになりますし、院の陛下は御出家をあそばしますし、お一人ぼっちのお心細い宮様ですから、御親切なお言葉をいただきますことは、この上なく幸福に思召すかと存ぜられます。法皇様も宮様があなた様を御信頼あそばして御保護の願えますようにとの思召しがおありあそばすらしく存じ上げました。私どももそのお言葉を承ってまいったのでございます」

などと言った。

「もったいないお手紙をあちらからくださいました時から、どうかしてお力にならなければと心がけてはいるのでございますが、何と申しても私が賢くなくて」

とあたたかい気持ちを女王は見せて、姉が年少の妹に対するふう

で、宮のお気に入りの絵の話をしたり、雛遊びひなはいつまでもやめられないものであるとかいうことを若やかに語っているのを、宮は御覧になって、院のお言葉のように、若々しい気立ての優しい人であると少女おとめらしいお心にお思いになり、打ち解けておしまいになった。

これ以来手紙が通うようになって、友情が二人の夫人の間に成長していった。書信でする遊び事もなされた。世間はこうした高貴な家庭の中のことを話題にしたがるもので、初めごろは、

「対の奥様はなんといいても以前ほどの御寵愛ちようあいにあつていられなくなるであらう。少しは院の御情が薄らぐはずだ」

こんなふうにも言ったものであるが、実際は以前に増して院がお愛しになる様子の見えることで、またそれについて宮へ御同情を寄せる

ような口ぶりでなされる噂うわさが伝えられたものであるが、こんなふうに  
寢殿の宮も対の夫人も睦むつまじくなられたのであるからもう問題にしよ  
うがないのであった。

十月に紫夫人は院の四十の賀のために嵯峨さがの御堂みどうで薬師仏の供養を  
することになった。たいそうになることは院がとめておいでになった  
から、目だたせない準備をしたのであった。それでも仏像、経箱、経  
巻の包みなどのりっぱさは極楽も想像されるばかりである。そうした  
最勝王経、金剛、般若はんにゃ、寿命経などの読まれる頼もしい賀の営みで  
あった。高官が多く参列した。御堂のあたりの嵯峨野の秋のながめの  
美しさに半分は心が惹ひかれて集まった人なのであろうが、その日は霜  
枯れの野原を通る馬や車を無数に見ることができた。盛んな誦経ずきようの申

し込みが各夫人からもあつた。二十三日が仏事の最後の日で、六条院は狭いまでに夫人らが集まって住んでいるため、女王には自身だけの家のように思われる二条の院で賀の饗宴きようえんを開くことにしてあつた。賀の席上で奉る院のお服類をはじめとして当日用の仕度したくはすべて紫夫人の手でととのえられているのであつたが、花散里夫人や、明石夫人あかしなども分担したいと言ひ出して手つだいをした。二条の院の対の屋を今は女房らの部屋へやなどにも使わせることにしていたのであるが、それを片づけて殿上役人、五位の官人、院付きの人々の接待所にあてた。寢殿の離れ座敷を式場にして、螺鈿らでんの椅子いすを院の御ために設けてあつた。西の座敷に衣裳いしやうの卓を十二置き、夏冬の服、夜着などの積まれたそれらの上を紫の綾あやで覆おおうてあるのも目に快かつた。中の品物の見え

ないのも感じがいいのである。椅子の前には置き物の卓が二つあつて、支那しなの羅うすものの裾すそばかりの覆おおいがしてある。挿頭かざしの台は沈じんの木の飾り脚あしの物で、蒔絵まきえの金の鳥が銀の枝にとまっていた。これは東宮の桐壺の方が受け持ったので、明石夫人の手から調製させたものであるからきわめて高雅であつた。御座おましの後ろの四つの屏風びょうぶは式部卿しきぶきようの宮がお受け持ちになつたもので、非常にりっぱなものだった。絵は例の四季の風景であるが、泉や滝の描かき方に新しい味があつた。北側の壁に添つて置き棚が二つ据すえられ、小物の並べてあることは定きまつた形式である。南側の座敷に高官、左右の大臣、式部卿の宮をはじめとして親王がたのお席があつた。舞台の左右に奏樂者の天幕ができ、庭の西と東には料理の箱詰めが八十、纏頭用てんとうの品のはいつた唐櫃からびつを四十並べて

あつた。午後二時に楽人たちが参入した。万歳楽、皇※こうじょうなどが舞われ、日の暮れ時に高麗楽こうらいの乱声らんじょうがあつて、また続いて落蹲らくそんの舞われたのも目馴なれず珍らしい見物であつたが、終わりに近づいた時に、権中納言と、右衛門督うえもんのかみが出て短い舞をしたあとで紅葉もみじの中へはいって行つたのを陪観者は興味深く思つた。昔の朱雀院すざくの行幸みゆきに青海波が絶妙の技であつたのを覚えている人たちは、源氏の君と当時の頭中將とうちゅうのよう  
にこの若い二人の高官がすぐれた後継者として現われてきたことを言  
い、世間から尊敬されていることも、りっぱさも美しさも昔の二人の  
貴公子に劣らず、官位などはその時の父君たち以上に進んでいるこ  
となどを年齢としまでも数えながら語つて、やはり前生の善果がある家の  
子息たちであると両家を祝福した。六条院も涙ぐまれるほど身にしむ

追憶がおりになった。夜になって樂人たちの退散していく時に紫の夫人付きの家職の長が下役たちを従えて出て、纏頭品の箱から一つずつ出して皆へ頒<sup>わか</sup>った。白い纏頭の服を皆が肩にかけて山ぎわから池の岸を通って行くのをはるかに見ては鶴<sup>つる</sup>の列かと思われた。席上での音楽が始まっておもしろい夜の宴になった。樂器は東宮の御手から皆呈供されたのである。朱雀院<sup>すざく</sup>からお譲られになった琵琶<sup>びわ</sup>、帝<sup>みかど</sup>からお賜わりのになった十三絃<sup>げん</sup>の琴などは六条院のためにお馴染<sup>なじみ</sup>の深い音色<sup>ねいろ</sup>を出して、何につけても昔の宮廷が思われになる方であつたから、またさまざまの恋しい昔の夢をお描<sup>か</sup>かせした。入道の宮がおいでになったなら四十の御賀も自分が主催して行なつたことであらう。今になつては何を志としてお見せすることができよう、すべて不可能なことになつ

たと院は御歎息<sup>たんそく</sup>をあそばした。女院をお失いになったことは何の上にも添う特殊な光の消えたことであると帝も寂しく思召すのであって、せめて六条院だけを最高の地位に据<sup>す</sup>えたいというお望みも実現されないことを始終残念に思召す帝であつたが、今年は四十の賀に託して六条院へ行幸<sup>みゆき</sup>をあそばされたい思召しであつた。しかしそれも冗費は国家のためお慎みになるようにと六条院からの御進言があつておできにならぬためにくやしく思召すばかりであつた。

十二月の二十日過ぎに中宮<sup>ちゅうぐう</sup>が宮中から退出しておいでになつて、六条院の四十歳の残りの日のための祈祷<sup>きとう</sup>に、奈良<sup>なら</sup>の七大寺へ布四千反を頒<sup>わか</sup>つてお納めになった。また京の四十寺へ絹四百疋<sup>びき</sup>を布施にあそばされた。養父の院の深い愛を受けながら、お報いすることは何一つでき



なかった自分とともに、御父の前皇太子、母御息所みやすどころの感謝しておられる志も、せめてこの際に現わしたいと中宮は思召したのであるが、宮中からの賀の御沙汰ごさたを院が御辞退されたあとであつたから、大仰おおぎようになることは皆おやめになつた。

「四十の賀というものは、先例を考えますと、それがあつたあとをな お長く生きていられる人は少ないのですから、今度は内輪のことにしてこの次の賀をしていただく場合にお志を受けましょう」

と六条院は言つておいでになつたのであるが、やはりこれは半公式の賀宴で派手はでになつた。六条院の中宮のお住居すまいの町の寝殿が式場になつていて、前にお受けになつた幾つかの賀の式に変わらぬ行き届いた設けがされてあつた。高官への纏頭てんとうはお后きさききの大饗宴きようえんの日の品々に準

じて下された。親王がたには特に女の装束、非参議の四位、殿上役人などには白い細長衣ほそなが一領、それ以下へは巻いた絹を賜わった。院のためにとのえられた御衣服は限りもなくみごとなもので、そのほかに国宝とされている石帯せきたい、御剣を奉らせたもうたのである。この二品などは宮の御父の前皇太子の御遺品で、歴史的なものだったから院のお喜びは深かった。古い時代の名器、美術品が皆集まったような賀宴になったのであった。昔の小説も贈り物をすることを最も善事のように書き立ててあるが、面倒で筆者にはいちいち書けない。

帝は六条院へ好意をお見せになろうとした賀宴をやむをえず御中止になったかわりに、そのころ病気のため右大將を辞した人のあとへ、中納言をにわかにばってき拔擢しておすえになった。院もお礼の御挨拶をあいさつあそ

ばされたが、それは、

「突然の御恩命はあまりに過分なお取り扱いで、若い彼が職に堪えま  
すかどうか疑問にいたしております」

こんな謙遜けんそんなお言葉であつた。

帝みかどはこの右大將を表面の主催者として院の四十の賀の最後の宴を北

東の町の花散里夫人の住居すまいに設けられた。派手はでになることを院は避け

ようとされたのであつたが、宮中の御内命によつて行なわれるこの賀

宴は、すべて正式どおりに略したところのないすばらしいものになつ

た。幾つかの宴席の料理の仕度したくなどは内廷からされた。屯食とんじきの用意な

どはお指図さしずを受けて頭中將とうちゅうが皆したのである。親王いづかたお五方、左右の大

臣、大納言二人、中納言三人、参議五人、これだけが参列して、御所

の殿上役人、東宮、院の殿上人もほとんど皆集まつて参っていた。院のお席の物、その室に備えられた道具類は太政大臣が聖旨を奉じて最高の技術者に製作させた物であつた、そしてお言葉を受けてこの大臣もお式の間へ臨んだ。院はこれにもお驚きになつて恐縮の意を表されながら式の座へお着きになつた。中央の室に南面された院のお席に向き合つて太政大臣の座があつた。きれいで、りっぱによく肥ふとつていて、位人臣をきわめた貫禄かんろくの見える男盛りと見えた。院はまだ若い源氏の君とお見えになるのであつた。四つの屏風びょうぶには帝の御筆蹟ひつせきが貼はられてあつた。薄地の支那綾しなあやに高雅な下絵のあるものである。四季の彩色絵よりもこのお屏風はりっぱに見えた。帝の御字は輝くばかりおみごとで、目もくらむかと思ひなしも添つて思われた。置き物の台、弾ひ

き物、吹き物の楽器は蔵人所くらうじょうじんから給せられたのである。右大将の勢力も強大になっていたため今日の式のはなやかさはすぐれたものに思われた。四十匹の馬が左馬寮、右馬寮、六衛府りくえふの官人らによって次々に引かれて出た。おそれ多いお贈り物である。そのうち夜になった。例の万歳楽、賀皇恩がこうおんなどという舞を、形式的にだけ舞わせたあとで、お座敷の音楽のおもしろい場が開かれた。太政大臣という音楽の達者たてものが臨場していることにだれもだれも興奮しているのである。琵琶びわは例によつて兵部卿ひょうぶきやうの宮、院は琴きん、太政大臣は和琴わごんであつた。久しくお聞きにならぬせいか和琴の調べを絶妙のものとしてお聞きになる院は、御自身も琴を熱心にお弾ひきあそばされたのである。いかなる時にも聞きえなかつた妙音も出た。またも昔の話が出て、子息の縁組みその他の

ことで昔に増した濃い親戚しんせき關係を持つことにおなりになった二人は、睦むつまじく酒杯をお重ねになった。おもしろさも頂天に達した氣がされて、酔い泣きをされるのもこのかたがたであつた。お贈り物には、すぐれた名器の和琴を一つ、それに大臣の好む高麗こまふえ笛を添え、また紫檀したんの箱一つには唐本と日本の草書の書かれた本などを入れて、院は歸ろうとする大臣の車へお積ませになった。馬を院方の人を受け取つた時に右馬寮の人々は高麗樂を奏した。六衛府の官人たちへの纏頭てんとうは大将が出した。質素に質素にとして目だつことはおやめになったのであるが、宮中、東宮、朱雀院すざく、后の宮きさう、このかたがたとの關係が深くて、自然にはなやかさの作られる六条院は、こんな際に最も光る家と見えた。院には大将だけがお一人息子で、ほかに男子のないことは寂しい

氣もされることであつたが、その一人の子が万人にすぐれた器量を持ち、君主の御覚えがめでたく、幸運の人というにほかならぬことが証しされていくにつけて、この人の母である夫人と、伊勢いせの御息所みやすどころとの双方の自尊心が強く苦しく競い合つた時代に次いで、中宮とこの大將が双方とも、院の大きい愛のもとでりっぱなかたがたになられたことが思わせられる。この日大將から院へ奉つた衣服類は花散里夫人が引き受けて作つたのである。纏頭の物は皆三条の若夫人の手でできたようであつた。六条院のはなやかな催し事もよそのことに聞いていた花散里夫人には、こうした生きがいのある働きをする日はあることかと思われたものであるが、大將の母儀ぼぎになつてゐることによつて光榮が分かつたのである。

新年になった。六条院では淑景舎しげいしやの方かたの産期が近づいたために不断の読経どきようが元日から始められていた。諸社、諸寺でも数知れぬ祈禱きとうをさせておいでになるのである。院は昔の葵夫人あおいが出産のあとで死んだことで懲りておいでになって、恐ろしいものと子を産むことを感じておいでになり、紫夫人に出産のなかったことは物足らぬお気持ちもしながらまたうれしくお思われにもなるのであったから、まだ少女おんむすめといつてよいほどの身体からだで、その女の大厄たいやくを突破せねばならぬ御女おんむすめのことを、早くから御心配になっていたが、二月ごろからは寝ついてしまふほどにも苦しくなったふうであるのを院も女王にようおうも不安がられないはずもない。陰陽師おんようじどもは場所を変えて謹慎をせねばならぬと進言するの  
で、院外の離れた家へ移すのは気がかりに思召され、明石夫人あかしの北の



町の一つの対の屋へ淑景舎の病室は移されることになった。こちらはただ大きい対の屋が二つと、そのほかは廊にして廻めぐらせた座敷ばかりの建物であつたから、廊座敷に祈祷の壇が幾つも築かれ、評判のよい祈祷僧は皆集められて祈っていた。明石夫人は桐壺きりつぼの方が平らかに出産されるか否かで自身の運命も決まることと信じていて、一所懸命な看護をしていた。明石入道の尼夫人はもうぼけた老婆になっているはずである。姫君に接近のできることを夢のような幸福と思つて、移つて間もなくこの人がそばへ出てくるようになった。もう幾年か明石夫人は姫君に付き添っているのであるが、桐壺の方の生まれてきた当時の事情などはまだ正確に話してなかつた。それを老尼はうれしさのあまりに病室へ来ては涙まじりに、昔の話を身じまいをしながら姫君へ

語るのであった。初めの間は無気味な老婆であると姫君は思つて、顔ばかり見つめているのを常としたが、実母にそうした母親があるということは何かの時に聞いたこともあつたのを思い出してからは好意を持つようになった。明石で生まれた時のこと、また院がその海岸へ移つて来ておいでになつたころの様子などを尼君は言う、

「京へお帰りになりました時、一家の者はこれで御縁が切れてしまうのかとひどく悲しんだものでございますがね、お生まれになつたお姫様が暗い運命から私たちを救い上げてくださったのでございますから、ありがたいことと御恩を思つております」

はらはらと涙をこぼしている。そんな哀れな昔の話をこの尼さんが聞かせてくれなければ、自分はただ疑つてみるだけで、真相は何もわ

からずにしまったかもしれぬと思つて桐壺の方は泣いた。心のうちでは、自分の身の上は決して欠け目ないものとは言えなかつたのを、養母の夫人の愛にみがかれて十分な尊敬も受ける院の御女おんむすめともなりえたのである、思い上がった心で東宮の後宮に侍していても、他の人たちを自分に劣つたもののように見たりしてきたのは過失あやまりである、表面に出して言わないでも、世間の人は自分のその態度を譏そしつたことであるとうと反省もされるようになった。実母は少し劣つた家の出であるとは知つていても、生まれたのはそうした遠い田舎いなかの家であつたなどとは思ひも寄らぬことだったのである。おおように育てられ過ぎたせいだつたかもしれぬが、自身の今まで知らぬとは不思議なことのように思われるのであつた。祖父である入道が現在では人間離れのした仙人せんじん

のような生活をしているということも若い心には悲しかった。姫君がにわかに関ろいゝろな物思いを胸に持つて、寂しい顔をしている時に明石夫人が出て来た。昼の加持にあちらこちらから手つだいの者や僧が来て騒いでいるのを、この人は今まで監督していたのであるが、来てみると姫君のそばには他の者がいずに尼君だけが得意な気分を見せて近くにすわっていた。

「体裁が悪うございますよ。短い几帳きちようで身体からだをお隠しになつてお付きしていらつしやればいいのに、風が吹いていますからお座敷の外から人がのぞけば、あなたはお医者のような恰好かっこうでおそばに出ているのですから恥ずかしい。こんなふうにしておいでになつてはね」

などと明石は片腹痛がつていた。品のよいとりなしでこうしている

のであると尼君自身は信じているのであるが、もう耳もあまり聞こえなくて、娘の言葉も、

「ああよろしいよ」

などと言っているかげんに聞いているのである。六十五、六である。しゃんとした尼姿で上品ではあるが、目を赤く泣きはらしているのを見ては、古い時代、つまり源氏の君の明石の浜を去ったところによくこうであつたことが思い出されて夫人ははつとした。

「間違いの多い昔話などを申していたのでしよう。怪しくなりました記憶から取り出します話には荒唐無稽な夢こうとうむけいのようなこともあるのでございますよ」

と、微笑を作りながら夫人のながめる姫君は、艶えんにきれいな顔をし

ていて、しかも平生よりはめいつたふうが見えた。自身の子ながらも  
もつたいたく思われるこの人の心を、傷つけるような話を自身の母が  
して煩悶はんもんをしているのではないか、お后きさきの位にもこの人の上る時を  
待つて過去の真実を知らせようとしていたのであるが、現在はまだ若  
いこの人でも、昔話から母の自分をうとましく思うことはあるまい  
が、この人自身の悲観することにはなろうと明石夫人は憐あわれんだ。加持  
が済んで僧たちの去ったあとで、夫人は近く寄つて菓子などを勧め、  
「少しでも召し上がれ」

と心苦しいふうに姫君を扱っていた。尼君はりっぱな美しい桐壺きりつぼの  
方に視線をやつては感激の涙を流していた。顔全体に笑えみを作つて、  
口は見苦しく大きくなっているが、目は流れ出す涙で悲しい相になつ

ていた。困るというように明石は目くばせをするが、気のつかないふうをしている。

「老いの波かひある浦に立ちいでてしほたるあまをたれか咎とがめん

昔の聖代にも老齡者は罪されないことになっていたのでございますよ」

と尼君は言った。硯箱すずりばこに入れてあつた紙に、

しほたるあまを波路のしるべにて尋ねも見ばや浜の苦屋とまやを

こんな歌を姫君は書いた。明石も堪えがたくなつて泣いた。

世を捨てて明石の浦に住む人も心の闇は晴るけしもせじ

などと言って、この場の悲しい空氣の密度をより濃くすまいとした。姫君は祖父に別れた朝のことなどを、心には忘れていても、夢の中だけでも見たいのが見えぬのは残念であると思った。

三月の十幾日に桐壺の方は安産した。その時まではあぶないことのようにして、多くの祈祷が神仏にささげられていたのであるが、たいした苦しみもなく、しかも男宮をお生みしたのであつたから、この上の幸福もないようで院のお心も落ち着いた。こちらは蔭かげの場所のよう



になつていた所で、ただ風流な座敷が幾つも作られてある建物では、いかめしい今後続いてあるはずの産養うぶやしなひの式などに不便であつて、老尼君のためにだけはうれしいことと見えても、外見へは不都合であるために、南の町へ産屋うぶやを移す計画ができていた。紫の女王によおうも出て来た。白い服装をして母らしく若宮をお抱きしている姫君はかわいく見えた。紫夫人は自身に経験のないことであつたし、他の人の場合にもこうした産屋などに立ち合つたことはなかったから、幼い宮を珍しくおかかわいく思うふうが見えた。まだあぶないように思われるほどの小さい方を女王は始終手に抱いているので、ほんとうの祖母である明石夫人は、養祖母に任せきりにして、産湯うぶゆの仕度したくなどにばかりかかっていた。東宮宣下せんげの際の宣旨拝受の役を勤めた典侍ないしのすけがお湯をお使わせする

のであった。迎え湯を盥たらひへ注ぎ入れる役を明石の勤めるのも気の毒で  
淑景しげい舎の方の生母がこの人であることは知らないこともない東宮がた  
の女房たちは目をとめて、どこかに欠点でもある人なら当然のことと  
も思っておられようが、あまりに気高けだかい明石の姿はこの人たちに畏敬いけい  
の念を起こさせて、未来の天子の御外祖母たる因縁を身に備えて生ま  
れた人に違いないというようなことも思わせた。お湯殿の式のくわし  
い記事は省略する。

六日めに以前の南の町の御殿へ桐壺の方は移った。七日の夜には宮  
中からのお産養うぶやしなひがあつた。朱雀院すざくが世捨て人の御境遇へおはいりにな  
つたために、そのお代わりにあそばされたことであつたらしい。宮  
中から頭の弁が宣旨で来て、この日の派手はでな祝宴を管理した。纏頭てんとうの

品々は中宮のお志で慣例以上の物が出された。親王がた、諸大臣家からもわれもわれもとはなやかな御祝い品の来るお産屋うぶやであつた。この際の祝宴については、いつも華奢かしやに流れることは遠慮したいとお言いになる院も、あまりお止めにはならなかつたために、目もくらむほどのお産養の日が続き、ぼんやりとしていた筆者にその際の洗練された細かな物好みで製作されたおのの式の賀品などのことによく気がつかなかつた。

院は若宮をお抱きになつて、

「大將が幾人も持った子を今まで見せないのを恨めしく思っていたが、こんなかわいい方が授かつた」

と愛しておいでになるのはごもつともなことである。毎日物が引き

伸ばされるように若宮は大きくおなりになるのであった。乳母<sup>めのと</sup>などは新しい人をお見つけになることは当分されずに、これまでの六条院の女房の中から、身柄も性質もよい人ばかりを選んでお付けになった。明石夫人が聡明<sup>そうめい</sup>で、気高<sup>けだか</sup>い、おおような心を持っていながら、ある場合<sup>あはれ</sup>に卑下することを忘れずに、自身が表に出ようとするこのない態度のとれることについてはほめない人はなかった。紫夫人は顔をあらわに見せて話すようなことは今までこの人となかったのであるが、今度はよく睦<sup>むつ</sup>まじく話して、過去においては長く僭<sup>せん</sup>越<sup>えつ</sup>な競争者であると感じていた人に好意を持ちうるようになり、若宮を愛する気持ちの交流があたたかい友情までも覚えさすことになった。女王<sup>にょおう</sup>は子供好きであつたから、天児<sup>あまがっ</sup>の人形などを自身で縫ったりしている時はことさら

若々しく見えた。日夜を若宮のために心をつかう紫夫人であつた。明石の老尼は、若宮を満足できるほど拝見することのできないのを残念に思っていた。しかしそれがかえつて幸いであつたかもしれぬ、なおしばらくでもそばでお愛し申し上げるような時間が許されたものであれば、あとの恋しい思いで尼は死んだかもしれないから。

明石の入道も姫君の出産の報を得て、人間離れのした心にも非常にうれしく思われて、

「もうこれでこの世と別な境地へ自分の心を置くことができる」

と弟子どもに言い、明石の邸宅を寺にし、近くの領地は寺領に付けて以前から播磨の奥の郡に人も通いがたい深い山のある所を選定して、最後のこもり場所としてあつたものの、少しまだ不安な点が残し

ていく世にあつて、なおそこへは移らなかつた山の草庵そうあんへ、もう今後の子孫の運は仏神にお頼みするばかりであるとして入道は行つてしまふのであつた。近年はもう京の家族も順調に行つてゐることに安心して、使いを出してみることもなかつたのである。京から使いが送られた時にだけ短いたよりを尼君へ書いて來た。入道はいよいよ明石を立つ時に、娘の明石夫人へ手紙を書いた。

この幾年間はあなたと同じ世界にいながらすでに他界で生存するもののような気持ちでたいしたことのない限りはおたよりを聞こうともしませんでした。仮名書きの物を読むのは目に時間がかかり、念仏を怠ることになり、無益むやくであるとしたのです。またこちらのたよりもあげませんでした。承ると姫君が東宮の後宮へはいられ、そ

して男宮をお生み申されたそうで、私は深くおよろこびを申し上げる。その理由はみじめな僧の身で今さら名利を思うのではありません。過去の私は恩愛の念から離れることができず、六時の勤行をいたしながらも、仏に願うことはただあなたに関することで、自身の浄土往生の願いは第二にしていしましたが、初めから言えば、あなたが生まれてくる年の二月の某日の夜の夢に、こんなことを見たのです、私自身は須弥山しゅみせんを右の手にささげているのです。その山の左右から月と日の光がさしてあたりを照らしています。私には山の陰影かげが落ちて光のさしてくることはないのです。私はその山を広い海の上に浮かべて置いて、自身は小さい船に乗って西のほうをさして行くので終わったのです。その夢のさめた朝から私の心にはある自信

ができたのですが、何によってそうした夢に象徴されたような幸福に近づきうるかという見当がつかなかったところ、ちょうどそのころから母の胎に妊はらまれたのがあなたです。普通の書物にも仏典にも夢を信じてよいことが多く書かれてありますから、無力な親でいてあなたをたいせつなものにして育てていましたが、そのために物質的に不足なことの無いようにと京の生活をやめて地方官の中へはいったのです。ここでまた私の身の上に悪いことが起こり、しまいに土着して出家の人になり、あなたは姫君をお生みになったそのころのことは知っておいでになるとおりです。その時代に私は多くの願を立てていましたが、皆神仏のお容いれになることになり、あなたは幸福な人になられました。姫君が国の母の御位みくらいをお占めになった



暁には住吉すみよしの神をはじめとして仏様への願果たしをなさるようと申しておきます。私の大願がかなった今では、はるかに西方の十億の道を隔てた世界の、九階級の中の上の仏の座が得られることも信じられます。今から蓮華れんげをお持ちになる迎えの仏にお逢あいする夕べまでを私は水草の清い山にはいつてお勤めをしています。

光いでん暁近くなりにはけり今ぞ見しよの夢語りする

そして日づけがある。またあとへ、

私の命の終わる月日もお知りになる必要はありません。人が古い習慣で親のために着る喪服などもあなたはお着けにならないでお置き

なさい。人間の私の子ではなく、別な生命いのちを受けているものとお思  
いになって、私のためにはただ人の功德くどくになることをなさればよろ  
しい。この世の愉樂をわが物としておいでになる時にも後世ごせのこと  
を忘れぬようになさい。私の志す世界へ行っておれば必ずまた逢う  
ことができるのです。娑婆しやばのあなたの岸も再会の得られる期の現わ  
れてくることを思っておいでなさい。

こう書いて終わってあった。また入道が住吉やしろの社へ奉った多くの願  
文を集めて入れた沈じんの木の箱の封じものも添えてあった。尼君への手  
紙は細かなことは言わずに、ただ、

この月の十四日に今までの家を離れて深山みやまへはいります。つまらぬ  
わが身を熊狼くまおかみに施します。あなたはなお生きていて幸いの花の美し

く咲く日におあいなさい。光明の中の世界でまた逢いましょう。

と書かれただけのものであった。読んだあとで尼君は使いの僧に入道のことを聞いた。

「お手紙をお書きになりましたしてから三日めに庵いおりを結んでおかれました奥山へお移りになったのでございます。私どもはお見送りに山の麓ふもとへまで参ったのですが、そこから皆をお帰しになりました、あちらへは僧を一人と少年を一人だけお供にしてお行きになりました。御出家をなさいました時を悲しみの終わりかと思いましたが、悲しいことはそれで済まなかったのでございます。以前から仏勤めをなさいますひまに、お身体からだを楽になさいましてはお弾ひきになりましたきん琴と琵琶びわをいそぎ持ってよこさせになりました、仏前でお暇いとま乞いにお弾きになりました

あとで、樂器を御堂へ寄進されました。そのほかのいろいろな物も御堂へ御寄付なさいまして、余りの分をお弟子の六十幾人、それは親しくお仕えした人数ですが、それへお分けになり、なお残りました分を京の御財産へおつけになりました。いっさいをこんなふうに清算なさいまして深山の雲霞の中に紛れておはいりになりましたあとのわれわれ弟子どもはどんなに悲しんでいるかしれません」

と播磨の僧は言った。これも少年侍として京からついて行つた者で、今は老法師で主に取り残された悲哀を顔に見せている。仏の御弟子で堅い信仰を持ちながらこの人さえ主を失つた歎きから脱しうることができないのであるから、まして尼君の歎きは並み並みのことではなかつた。

あかし

明石夫人はたいてい南の町のほうへばかり行っていたが、明石の使いが入道の手紙をもたらしたことを尼君が報らせて来たため、そつと北の町へ帰つて来た。この人は自重して、少しのことによつて軽々しく往來する<sup>ゆきき</sup>ことはしないのであるが、悲しいたよりがあつたというので、忍びやかに出て来たのである。見ると尼君は非常に悲しいふうをしてすわっていた。<sup>ともしび</sup>燈を近くへ寄せさせて夫人は手紙を読んでみると、自身からもとどめがたい涙が流れた。他人にとっては何でもないことも子としては忘れがたい思い出になる昔のことが多くて、常に恋しくばかり思われた父は、こうして自分たちから永久に去つたのかと思うと、どうしようもない深い悲しみに落ちるばかりであつた。この夢の話によつて、自分に不相応な未来を期待して、人並みの幸福を受

けさせずに苦しめる父であるようにある時代の自分が恨んだのも、一つの夢を頼みにした父であつたからであると、はじめて理解のできた氣もした。少したつて尼君は、

「あなたがあつたために輝かしい光榮にも私は浴していますが、またあなたのためにどれほどの苦勞を心でしたことか。たいしたことのない家の子ではあつても、生まれた京を捨てて田舎へ行つたころも不運な私だと思われましたがね。あとになって生きながら別れなければならぬとは予想せずに、同じ蓮華れんげの上へ生まれて行く時まで変わらぬ夫婦でいようと互いに思つて、愛の生活には満足して年月を送つたのですが、にわかにああなたの境遇が変わつて、私もそれといつしよに捨てた世の中へ帰り、あなたがたが幸福に恵まれるのを目に見ては喜び

ながらも、一方では別れ別れになっている寂しさ、たよりなさを常に  
思つて悲しんでいましたが、とうとう遠く隔たったままでお別れして  
しまったのが残念に思われます。若い時代のあの方も人並みな処世法  
はおとりにならず、風変わりな人だったが、縁あつて若い時から愛  
し合つた二人の中には深い信頼があつたものですよ。どうしてこの世  
の中でいながら逢<sup>あ</sup>うことのできない所へあの方は行つておしまいな  
すつたのだろう」

と言つて泣いた。夫人も非常に泣いた。

「こうお言いになつても、すばらしい将来などというものが私にある  
ものですか。価値<sup>ねうち</sup>のない私がどうなりうるものでもないのですから、  
私を愛してくだすつたお父様にお目にかかることもできずにいるこの

悲しみにそれは代えられるほどのものと思われませんが、私たちは幸福な姫君をこの世にあらしめるために、悲しい思いも科せられているものと思うよりほかはありません。そんなふうにして山へおはいりになつては、無常のこの世ですもの、知らぬまにおかくれになるようなことになつては悲しゅうございますね」

とも言い、夜通し尼君と入道の話をしていた。

「昨日は私のあちらにいますのを院が見ていらつしやつたのですから、にわかに消えたようにこちらへ来ていましたは、軽率に思召すおぼしめでしょう。私自身のためにはどうしてもよろしゅうございますが、姫君に累を及ぼすのがおかawaiiそうで自由な行動ができませんから」

こう言つて夫人は夜明けに南の町へ行くのであつた。



「若宮はいかがでいらつしゃいますか。お目にかかることはできない  
ものですかね」

このことでも尼君は泣いた。

「そのうち拝見ができますよ。姫君もあなたを愛しておいでになつて、時々あなたのことをお話になりますよ。院もよく何かの時に、自分らの希望が実現されていくものなら、そんなことを不安に思つては済まないが、なるべくは尼君を生きさせておいてみせたいと仰せになりますよ。御希望とはどんなことでしょう」

と夫人が言うと、尼君は急に笑顔えがおになつて、

「だから私達の運命というものは常識で考えられない珍しいものなのですよ」

とよろこぶ。手紙の箱を女房に持たせて明石は淑景舎しげいしやの方かたの所へ  
歸った。

東宮から早く参るようという御催促のしきりにあるのを、

「ごもつともですわね。若宮様もいらっしゃるのですもの、どんなに  
早くお逢あいあそばしたいでしょう」

と紫夫人も言つて、院は若宮を東宮へお上のぼらせする用意をしておい  
でになった。桐壺の方は退出のお許しが容易に得られなかったのに懲  
りて、この機会に今しばらく実家の人になつていたい気持ちでいるの  
である。小さい身体からだで女の大難を経てきたのであつたから、少し顔が  
痩やせ細つて非常に艶えんな姿になつていた。

「はつきりとなさいませんか、もう少しこちらで御養生をなさいま

すほうがいいと思います」

と言うのは明石夫人の意見であつた。

「少し細られたこの姿をお目にかけるのはかえつてまたよい結果のあ  
るものなのだ」

などと院は言つておいでになるのである。明石は紫の女王によおうなどが対  
へ歸つたあとの静かな夕方に、姫君のそばへ来て、文書のはいつた沈じん  
の木箱を見せ、入道のことを語るのであつた。

「すべてのことが成り終わりますまでは、こんな物をお目につけない  
ほうがいいのかもしれませんが、人の命は無常なものでございますか  
らね。何も御承知にならぬうちに私が亡なくなりますことがありまして  
も、必ずしも臨終にあなた様のおいでがいただける身の上でもござい

ませんから、とにかく健在なうちにこうしたこともお聞かせしておく  
ほうがよいと存じまして、それに字が悪くて読みにくいものでござい  
ますがこの手紙もお見せすることにしたしましたから、御覧なさいま  
せ。この箱の中の願文は<sup>がんもん</sup>お居間の置き<sup>だな</sup>棚などへしまってお置きになり  
まして、何をなさることも可能な時がまいりましたら、これに書かれ  
てございます神様などへ入道がいたしました願のお<sup>むく</sup>酬いをなすつてく  
ださいませ。他人にはお話をなさらないほうがよろしゅうございま  
す。私はもうあなたのお身の上で何が不安ということもなくなつたの  
でございますから、尼になりたい気がしきりにいたすのでございまし  
て、長くお世話を申し上げることはできないでございましょう。あな  
たは対のお母様の御恩をお忘れになつてはいけませんよ。ありがたい

方でございます。拝見いたしまして、ああしたりっぱな人格の方は必ず命も長くお恵まれになるだろうと思っております。あなたとごいっしょにおりますことはあなたの幸福でないと私が思いまして、はじめて女王様にあなたをお譲り申し上げました時には、これほどまでの愛をあなたにお持ちになることは想像できませんで、それ以後もただ世間並みのよいといわれる継母ぐらいのことと思いましたが、あの方の御愛情はそんなものではありませんでした。あの方にお任せいたしますほど安心なことはないとよく私はわかったのでございます」

などと明石は淑景舎しげいしゃに言った。姫君は涙ぐんで聞いていた。実母に對しても打ち解けたふうができず、おとなしくものの多く言われない姫君なのである。入道の手紙は若い心に無気味なこわい気のされるよ

うなことが、古檀紙の分厚い黄色がかつた、それでも薰物たきものの香の染しんだのへ五、六枚に書かれてあるのを、姫君は身にしむふうで読んでいて額髪が涙にぬれていく様子が艶えんであつた。

院は女三にょさんの宮みやのお座敷のほうにおいでになつたのであるが、中の戸をあけてにわかになつてこちらへお見えになつたのを知つて、明石夫人は急なことで姫君の前に出された文書類を隠かくすことができず、几帳きちょうを少し前のほうへ引き寄せ、自身もその蔭かげへ姿を隠してしまつた。

「若宮が私の足音でお目ざめになりませんでしたか。しばらくでも見ずにいては恋しいものだから」

と院がお言いになつても姫君は黙っているのを見て、明石が、「対へおつれになつたのでございます」

と言った。

「けしからんね、若宮をわが物顔にして懐中ふところからお放ししないのだから。始終自身の着物をぬらして脱ぎかえているのですよ。軽々しく宮様をあちらへおやりするようなことはよろしくない。こちらへ拝見に来ればいいではないか」

「思いやりのないことを仰せになります。内親王様であつてもあの女王様に御養育おされになるのがふさわしいことと存じられますのに、まして男宮様は、そんなに尊貴でありあそばしても、あちこちおつれ申すほどのことが何でございましょう。御冗談ごじやうだんにでも女王様のことをそんなふうにおっしゃってはよろしくございません」

明石夫人はこう抗弁した。院はお笑いになって、

「ではもうあなたがたにお任せきりにすべきだね。このごろはだれから私に冷淡に扱われる。今のようなたしなめを言ったりする人もある。そうじゃありませんか、こんなに顔を隠して、私を悪くばかり」

と、お言いになって、几帳を横へお引きになると、明石は清い顔をして中の柱に品よくよりかかっているのであった。先刻さつきの箱もあわて隠すのが恥ずかしく思われてそのままにしてあった。

「何の箱ですか。恋する男が長い歌を詠よんで封じて来たもののような気がする」

院がこうお言いになると、

「いやな御想像でございますね。御自身がお若返りになりましたの



で、私どもさえまで承ったこともないような御冗談をこのごろは何い  
ます」

と明石は言つて微笑を見せていたが、悲しそうな様子は瞭然りようぜんとわか  
るのであつたから、不思議に思ひになるふうのあるのに困つて、明  
石が言つた。

「あの明石の岩窟いわやから、そつとよこしました経巻とか、まだお酬むくいの  
できておりません願文の残りとかなのでございますが、姫君にも昔の  
ことをお話しする時があれば、これもお目にかけたらどうかと申して  
もまいっているのでございますが、ただ今はまだそうしたものを御覧  
なさいます時期でもないのでございますから、お手をおつけになりま  
せん」

お聞きになつて、娘と母に悲しい表情の見えるのももつともである  
とお思ひになつた。

「あれ以後ますます深い信仰の道を歩んでおいでになることである  
う。長命をされて長い間のお勤めが仏にできたのだから結構だね。世  
間で有名になつている高僧という者もよく観察してみると、俗臭のな  
い者は少なくて、賢い点には尊敬の念も払われるが、私には飽き足ら  
ず思われる所がある、あの人だけはりっぱな僧だと私にも思われる。  
僧がらずにいながら、心持ちはこの世界以上の世界と交渉しているふ  
うに見えた人ですよ。今ではまして係累もなくなつて、超然としてお  
られるだろうあの人が想像される。手軽な身分であればそつと行つて  
逢<sup>あ</sup>いたい人だ」

院はこうお言いになった。

「ただ今はもうあの家も捨てまして、鳥の声もせぬ山へはいったそうでございます」

「ではその際に書き残されたものなのだね。あなたからもたよりはしていますか。尼さんはどんなに悲しんでおいでになるだろう。親子の仲とはまた違った深い愛情が夫婦の仲にはあるものだからね」

院も涙ぐんでおいでになった。

「あれからのいろいろな経験をし、いろいろな種類の人にも逢<sup>あ</sup>ったが、昔のあの人ほど心を惹<sup>ひ</sup>く人物はなくて、私にも恋しく思われる人なのだから、そんなことがあれば夫婦であつた尼君の心はいたむことだろう」

ともお言いになる院に、入道の夢の話をお思い合わせになることがあろうもしれぬと明石夫人はその手紙を取り出した。

「変わった梵<sup>ぼんじ</sup>字とか申すような字はこれに似ておりますが読みにくい字で書かれましたものでも御参考になることが混じっているようでございますからお目にかけます。昔の別れにももう今日のあることを申しております、あきらめたつもりでおりますも、やはりまた悲しゅうございます」

と言い、感じの悪くない程度に泣いた。院は手にお取りになつて、「りっぱじゃありませんか。老いぼけてなどいないいい字だ。どんな芸にも達しておられて、尊敬さるべき人なのだが、処世の術だけはいまよくゆかなかった人だね。あの人の祖父の大臣は賢明な政治家だった

のが、ある一つのこととて失敗をされたために、その報いで子孫が栄えないなどと言う人もあつたが、女系をもつてすれば繁栄でないとは言われなくなつたのも、あの人の信仰が御仏みほとけを動かしたといつてよいことですね」

などと言ひ、涙をぬぐいながら読んでおいでになつたが、夢の話の所はことに院の御注意を惹ひいた。常人の行ないができずに、むやみに思い上がった望みを持つ男であると人の批難を受け、自分なども非常に狂氣じみて結婚を強要する人だと疑つて思つていたことも、姫君が生まれてきたことで、前生の因縁がかくあつた間柄であると認めたのであるが、なおそれ以外の未来にどんな望みを入道が持っているかは知らずにいたが、これで見れば初めから君王の母がその家から出る

確信があつたらしい。冤罪えんざいを蒙こうむつて漂泊してまわる運命を自分が負つたことも、この姫君が明石で生まれるためなのであつた。神仏にかけた願はどんなものであつたのであろうと、心で拝をなされながらその箱を院はお取りになつた。

「これといっしょにあなたに見せておきたいものもありますから、またそのうち私からもお話することにしよう」

と院は姫君へお言いになつた。そのついでに、

「もうあなたは自分の生まれてきた事情を明らかに知ることができたでしょうが、あちらのお母様の好意をおろそかに思つてはなりませんよ。真実の親子、肉身の仲でなくて、他人が少しでも愛してくれ、親切にしてくれるのはありがたいことだと思わなければならぬ。まし

て実母があなたのそばへ来たあとまでも初めどおりにあなたを愛することが変わらずに、あなたに幸福があるようにとばかりあの人は願っています。昔からある継母話ママははのように、表面だけを賢そうにして継子ママこの世話をする、それはまあよいと見られている母親も、また曲がった心で娘を苦しめている母親も、娘のほうで善意にばかりものを解釈して信頼してやれば、こんな人を憎んでは罪になるという気がして反省するのがありますし、またよい性格の人であれば、継娘ママこに気に入らぬ所はあっても、母として信頼される立場になつては、いつとなく最初の態度を変えるのもあるでしょう。何でもないことに難くせをつけ、愛の皆無な思いやりのない継母でとうてい娘のほうから近づけないのもあるでしょう。私はそうたくさん女の人を知っているのではない

が、とにかく私の知っている人で、生まれもよく、婦人としての見識も備わった人で、またそれぞれの長所を持った人でも、自分の娘を託しうる人をその中から選び出すのは困難です。真に心の癖のないよい女性は対のお母様以外にありません。これこそ善良な女性というべきだと私は信じている。善良といっても単にお人よしの締まりのない人は頼みになりません」

と訓<sup>おし</sup>えておいでになるのを聞いていて、紫夫人の偉さが明石にうなずかれた。

「あなただけではその訳もわかる人なのだから、仲よくしてこの方のお世話もいっしょにしてください」

とまた小声で明石へお言いになった。



「ただ今まで仰せにはなりません。女王様の御好意がよくわかるものでございますから、毎度そのことをお話しいたしております。私を失礼な女と思召すのでございましたら、<sup>おぼしめ</sup>この方をこれほどにお愛しにもならないでございましょうが、自分で片腹痛く存じますまでに私を御同等な人のようにお扱ってくださいますから、私は恐縮いたすばかりでございます。何の価値もない私などが亡<sup>な</sup>くなりもしませずいつまでも姫君のおそばにおりますのは、世間の聞こえもよろしくないことと御遠慮がされますのを、女王様の御好意でどうやら邪魔者らしくなくしていられます」

と明石が言うと、

「あなたに尽くす心などはないだろうが、姫君を母として愛する心を

今になって分けてもらいたいために譲るところがあるのでしよう。あなたもまた実母の権利を主張なさらないから双方の間が円満にいつて、私はこれほど安心のできることはない。ちよつとしたことにもあさはかな邪推などする人が一人でもあれば周囲の人は迷惑するものですからね。あなたがたには欠点がないから私は苦心をすることもない」

この院のお言葉を聞いて、明石は謙遜けんそんをしてよかったと思った。院は対のほうへお帰りになった。

「ますます女王様にょおうに御愛情が傾くようですね。実際だれよりもすぐれた、あらゆるものを具足した方なのですから、ごもつともだとわれわれでさえ思うというのは幸福な方ですね。宮様を表面だけりっぱなお

扱いをなすつても、あちらにおいでになることが多いのですもの、もったいないことともいわれます。御身分から申しても宮様が一段上の方なのですもの」

などと姫君に語りながらも、明石<sup>あかし</sup>はいささか自信を持つことができないのであった。それは姫君を持っていることにおいてである。高貴な方でさえ飽き足らぬ待遇を受けておいでになる夫人の中の一人で、薄い院の御愛情などをとやかく自分などは思うべきでないと、そのことではあきらめができていて、明石の心に悲しく思われるのは深い山へはいった父の入道のことだけであつた。尼君も終わりの文<sup>ふみ</sup>に書かれた良人<sup>おとと</sup>の一言を頼みにして、未来の世を考えながらも物思わしくしていた。

源大將は女三の宮をあるいは得られたかもしれぬ立場にいた人であつたから、六条院に来ておいでになるのを無関心でいることもできなかった。院の御子としてその御殿へ近づく機会もあつて、それとなく観察しているのであつたが、ただ若々しくおおようなという点だけのよさがある方のように、壮麗な六条院の本殿へお住ませになつて、今後の例になるまで派手<sup>はで</sup>な御待遇をしておいでになつても、それだけの貴女たる価値のありなしをこの人には疑われた。女房なども落ち着いた年齢の人は少なく、若い美人風、派手な騒ぎをするようなのが数も知れぬほどお付きしていて、歡樂的な空氣の横溢<sup>おういつ</sup>しているお住居<sup>すまい</sup>であつたから、そんな中に内気なおとなしい人が混じつて物思いをしていても輕佻<sup>けいちよう</sup>に騒ぐ仲間<sup>仲間</sup>に引かれて、それも同じように朗らかなふうを

していたり、毎日幼稚なお遊びの相手ばかりをしている童女の教養なさなどを院は気持ちよくは思召おぼしめさなかつたが、一つの趣味の目でものを見ようとされぬ方であつたから、それはそれとして許して見ておいでになつて、御干涉もあそばさなかつた。夫人になられた宮に対してだけはよくお教えになるのであつたから、以前よりは少しごりっぱな方らしくおなりになつた。そんなことが外聞にも知れてくるのを大將は見て、すぐれた人の少ない世だ、紫の女王がこんなに長い間ごいっしょにおられても、だれにもどんなふうな、どんな女性であるという想像もさせない重々しさがあつて、静かに深みのある女であることを願つて、またさすがに明朗な態度をとり、他を軽侮せず自身の自尊心を傷つけない用意があると思ひ、何年かの前に野分の夕べに見た面影のわき

が忘れがたかった。自身の夫人を愛する心は変わらなかったが、その人は相手にしがいのある優越した女性でなかった。恋人を妻にしたあとの安心した気持ちと、その人ばかりを見ている目の倦怠<sup>けんたい</sup>さで、父君が異なった幾人の夫人を集めておいでになる六条院の生活がうらやましくて、だれも皆自分の妻よりも相手にしておもしろい人のように思われてならないのである。その中で姫宮は御身分からいっても最も若い思い上がった大将などには興味の惹<sup>ひ</sup>かれる御存在ではあったが、表面をお飾りになるだけの愛情以外の何ものもないような院の御待遇がこの人によくわかっていて、あるまじい心を起こしたというでもなしに、お顔の見られる時があればよいとは願っていた。右衛門督<sup>うゑもんのかみ</sup>も始終六条院へ参っている人であった。この宮を山の帝<sup>みかど</sup>がどんなにお愛しあ

そばしたかもくわしく知っていて、御婿選びの時以来この宮に好意を持ち、この求婚者には院の帝も決してもつてのほかのこととは仰せられなかったという報は得たのでありながら、宮は六条院へ入嫁されたのを残念に思い、心も傷つけられたほどに苦しんで、今でも衛門督は恋を捨てていなかった。そのころから心安くなった女房によつて、宮の御様子を聞くのをはかない慰めにしていたのである。

「やはり対の夫人とは御競争がおできにならないようだ」

と世間の人の噂するのが耳にはいる時、もったいなくても自分の妻に得ておれば、そうした物思いはおさせしなかったはずである。二人となない六条院のようなりっぱな男で自分はないのであるがと、こんなことを言つて、始終心安くなっている小侍従という宮の女房を煽動す

るようなことを言い、無常の世であるから、御出家のお志の深い院が御遁世とんせいになる場合もあったなら、自分は女三の宮を得たいと絶えず思っている右衛門督うえもんのかみであつた。

三月ごろの空のうらかな日に、六条院へ兵部卿ひょうぶきやうの宮がおいでになり、衛門督もお訪ねたずして来た。院はすぐに出てお逢いあになつた。

「ひまな私の所などはこの時節などが最も退屈で、気を紛らすことができずに困っていましたよ。どこも皆無事平穏なのです。今日はどうして暮らしたらいいだろう」

などと院はお言いになつて、また、

「今朝大將けさが来ていたのだがどこにいるだろう。慰めに小弓でも射させたく思っている時にちょうどそれのできる人たちもまた来ていたよ



うだったが、もう皆出て行つたのだろうか」

近侍にこうお聞きになった。大將は東の町の庭で蹴鞠けまりをさせて見て  
いるという報告をお聞きになつて、

「乱暴な遊びのようだけれど、見た目に爽快そうかいなものでおもしろい」  
とお言いになり、

「こちらへ来るように」

と、院が大將を呼びにおやりになると、すぐに庭で蹴鞠をしていた  
人たちはこちらへ来た。若い公達きんだちが多かつた。

「鞠もこちらへ持つて来ましたか。だれとだれがあちらへ来ているの  
か」

大將の所にいた官人たちの名があげられ、

「それもこちらへ来させましょうか」

と大將は父君へ申した。寢殿の東側になった座敷には桐壺きりつぼの方がい  
たのであるが、若宮をお伴いして東宮へ参ったあとで、そこは空あき間  
になつていて静かだった。蹴鞠の人たちは流水を避けて競技によい場  
所を求めて皆庭へ出た。太政大臣家の公達とうのべんは頭弁などという成年者も  
兵衛佐ひょうえのすけ、太夫たゆうの君などという少年上りの人も混じつて来ているが、  
他に比べて皆風采ふうさいがきれいであつた。時間がたち日暮れになるまで、  
この競技に適して風も出ないよい日だと皆言つて庭上の遊びは続いて  
いたが、頭弁も闘志がおさえられなくなつたらしくその中へ出て行つ  
た。

「文官の誇りにする弁さえ傍観していられないのだから、高官になつ

ていても若い衛府えふの人などはおとなしくしている必要もない。私の青春時代にもそうしたことの仲間にはいりえないのが残念に思われたものだ。しかし軽々しく人を見せるね、この遊びは」

院がお勧めになるので、大将も衛門督も皆出て、美しい桜の蔭かげを行き歩いていたこの夕方の庭のながめはおもしろかった。あまり静かでないこの遊戯であるが、乱暴な運動とは見えないのも所がら人柄によるものなのであろう。趣のある庭の木立ちのかすんだ中に花の木が多く、若葉こずえの梢はまだ少ない。遊び気分の多いものであつて、鞠の上げようのよし悪しを競つて、われ劣らじとする人ばかりであつたが、本気でもなく出て混じつた衛門督えもんのかみの足もとに及ぶ者はなかった。顔がきれいで風采えんの艶なこの人は十分身の取りなしに注意して鞠を蹴り出す

のであったが、自然にその姿の乱れるのも美しかった。正面の階段きざはしの前にあたった桜の木蔭で、だれも花のことなどは忘れて競技に熱中しているのを、院も兵部卿の宮も隅すみの所の欄干によりかかって見ておいでになった。それぞれ特長のある巧みさを見せて勝負はなお進んでいったから、高官たちまでも今日はたしなみを正しくはおられぬように、冠の額を少し上へ押し上げたりなどしていた。大将も官位の上でいえば軽率なふるまいをすることになるが、目で見た感じはだれよりも若く美しく、桜の色の直衣のうしの少し柔らかに着馴ならされたのをつけて、指貫さしぬきの裾すそのふくらんだのを少し引き上げた姿は軽々しい形態でなかった。雪のような落花が散りかかるのを見上げて、萎しおれた枝を少し手に折った大将は、階段きざはしの中ほどへすわって休息をした。衛門督

が続いて休みに来ながら、

「桜があまり散り過ぎますよ。桜だけは避けたいでしょうね」

などと言つて歩いているこの人は姫宮のお座敷を見ぬように見てみると、そこには落ち着きのない若い女房たちが、あちらこちらの御簾みすのきわによつて、透き影に見えるのも、端のほうから見えるのも皆その人たちの派手はでな色の褌袖つまずでぐちばかりであつた。暮れゆく春への手向けの幣ぬさの袋かと見える。几帳きちようなどは横へ引きやられて、締まりなく人のいる気配けはいがあまりにもよく外へ知れるのである。

支那産しなの猫ねこの小さくかわいいのを、少し大きな猫があとから追つて来て、にわかに御簾みすの下から出ようとする時、猫の勢いに怖おそれて横へ寄り、後ろへ退のこうとする女房の衣きぬずれの音がやかましいほど外へ聞

こえた。この猫はまだあまり人になつかないのであったのか、長い綱につながれていて、その綱が几帳の裾<sup>すそ</sup>などにもつれるのを、一所懸命に引いて逃げようとするために、御簾の横があらわに斜<sup>はす</sup>に上がったのを、すぐに直そうとする人がない。その柱の所にいた女房などもただあわてるだけでおじけ上がっている。几帳より少し奥の所に桂姿<sup>うちぎすがた</sup>で立っている人があった。階段のある正面から一つ西になった間の東<sup>ま</sup>の端であったから、あらわにその人の姿は外から見られた。紅梅襲<sup>がさね</sup>なのか、濃い色と淡<sup>うす</sup>い色をたくさん重ねて着たのがはなやかで、着物の裾は草紙の重なった端のように見えた。桜の色の厚織物の細長らしいものを表着<sup>うわぎ</sup>にしていた。裾まであざやかに黒い髪の毛は糸をよって掛けたようになびいて、その裾のきれいに切りそろえられてあるのが美し

い。身丈に七、八寸余った長さである。着物の裾の重なりばかりが量かさ高く、その人は小柄なほっそりとした人らしい。この姿も髪のかかった横顔も非常に上品な美人であった。夕明りで見るのであるからこまごまとした所はわからなくて、後ろにはもう闇やみが続いているようなのが飽き足らず思われた。鞠まりに夢中わかきんだちでいる若公達が桜の散るのにも頓着とんちやくしていぬふうな庭を見ることに身が入って、女房たちはまだ端の上がった御簾に気がつかないらしい。猫のあまりに鳴く声を聞いて、その人の見返った顔に余裕のある気持ちの見える佳人であるのを、衛門督は庭にいて発見したのである。大將は簾すだれが上がって中に見えるのを片腹痛く思ったが、自身が直しに寄って行くのも軽率らしく思われることであつたから、注意を与えるために咳せき払いをすると、立ってい

た人は静かに奥へはいった。そうはさせながら大将自身も美しい人の隠れてしまったのは物足らなかつたのであるが、そのうち猫の綱は直されて御簾も下りたのを見て、大将は思わず歎息たんそくの声を洩もらした。ましてその人に見入っていた衛門督の胸は何かでふさがれた気がして、あれはだれであろう、女房姿でない桂であつたのによつて思うのである、人と混同すべくもない容姿から見当のほぼつく人を、なおだれであろうか確かに知りたく思った。素知らぬ顔を大将は作つていたが、自分の見た人を衛門督の目にも見ぬはずはないと思つて、その貴女をお気の毒に思った。何ともしがたい恋しく苦しい心の慰めに、大将は猫を招き寄せて、抱き上げるとこの猫にはよい薫香たきものの香が染しんでいて、かわいい声で鳴くのにもなんとなく見た人に似た感じがすると



いうのも多情多感というものである。

院がこの若い二人の高官のいるほうを御覧になつて、

「高官たちの席があまりに軽々しい。こちらへおいでなさい」

とお言いになつて、対のほうの南の座敷へおはいりになつたので人々も皆従つて行つた。兵部卿の宮はまた室へやの中へ院とごいっしょに席を移してお落ち着きになつた。高官らもごいっしょである。殿上役人たちは敷き物を得て縁側の座に着いた。饗応きやうおうというふうでなく椿餅もち、梨なし、蜜柑みかんなどが箱の蓋ふたに載せて出されてあつたのを、若い人たちは戯れながら食べていた。乾物類さかなの肴でお座敷の人々へは酒杯が勧められた。衛門督はじつと思ひ入つたふうをしていて、ともすれば庭の桜へ目をやった。大將はあのを共に見た人であつたから、衛門督が

作っている幻の何であるかがわかる気もするのであった。軽々しくあまりな端近へ出ておられたものであると大將は姫宮をお思いした。あれだけの方がなされることでもないのであるがと思われてくるにしたがつて、今まで不可解であつたことに合点のゆく氣もした。そんな欠点がおありになるために、世間でたいした方のようにいう割合に院の御愛情が薄いという理由が発見されたのである。貴女らしいお慎みが足らず、無邪氣であることは可憐かれんなものだが、その人の良人おとこになつては安心のできないことであらうと輕侮する念も起こつた。衛門督は道義も何も思わぬ盲目的な情熱に燃えていた。思いも寄らぬ物の間からほのかながらも確かにその方を見ることができたのも、自分の長い間の恋の祈りが神仏に受け入れられた結果であらうと、こんな解釈をし

ながらも、ただそれが瞬間のことであつたのを残念がつた。

院は座中の人に昔の話をいろいろあそびして、

「太政大臣は私の相手で勝負をよく争われたものだが、蹴鞠けまりの技術だけはとうてい自分が敵することのできぬ巧さがおありになった。親のすべてが子に現われてくるものではなからうが、やはり芸の道だけは不思議によく伝わるものだね。あなたの今日のできばえはたいしたものだった」

と衛門督へお言いになると、微笑を見せて

「他の点では父祖を恥ずかしめるような私でございますが、遺伝の蹴鞠の芸だけで後世へ名を残すことになりましたらそれで無事かもしれせん」

と言った。

「何も悪くはない。どんなことでも人に出抜けたことは書いておいて後世へ伝うべきだから」

などと冗談じょうだんをお言いになる院の御様子の若々しくて、またお美しいのを衛門督は見て、自分は何によつてこの方をおいて宮のお心を自分へ向けることができようと院と自身を比較してもみたが、何からも優越したものを見いだされないのをついに知り、衛門督は寂しい心になつて六条院を退出した。大将も歸りを共にして衛門督と車中で話合つた。

「春の日の退屈を紛らわすのには六条院へ伺うのがいちばんよいことですね。また今日のようなひまの出来た時分、桜の散らぬ間にもう一

度来るようにおつしやっていましたから、春を惜しみがてらにこの月のうちにもう一度、その時は小弓をお供にお持たせになつていらつしやい」

と大将は言うのであつた。道の別れ目までこうして同車して行くのであつたが、衛門督は女三にょさんの宮みやのお噂うわさばかりがしたくて、

「院は今でも平生のお住居すまいは対のほうに決めていらつしやるようですね。宮様はどんな気持ちでいられるだろう。朱雀院様すざくが御秘蔵になつた方が、第一の寵ちようを他の夫人に譲つて、しかも同じ家におられるかと思うとお気の毒ですね」

こんな無遠慮なことを言い出すと、

「そんな失礼なことを院はなさいませんよ。対の夫人は普通にお婚めとり

になつたのではなく、御自身でお育てになつた方だという事実から、少し違つた親しみがおありになるだけでしよう。宮様を何事の上にも第一夫人として立てておられますよ」

と大将は否定した。

「そんなことはまあ言わないでお置きなさい。私は皆聞いて知つていますよ。とてもお気の毒な御様子でおられる時があるのだと言いますよ。光輝ある院の姫君がそれですよ。もつたない気のするのが当然じゃありませんか。

いかなれば花に木伝ふ鶯こ　うぐひすの桜を分きてねぐらとはせぬ

春の鳥でいながらねえ。私には合点のいかないことですよ」

とも言う。穏当でないとえをこの人はする、こんな乱暴なことを言うようになったのは、自分が想像したとおりに姫君を見た友が恋を覚えたものに違いないと大将は思った。

「深山木に<sup>みやまぎ</sup>峙<sup>ねぐら</sup>定むるはこ鳥もいかでか花の色に飽くべき

あなたは誤解の上に立脚してお言いになるのだ」

と反対して言ったが、興奮している右衛門督とこの問題を語ること  
は避くべきであると思い、あとはほかの話に紛らして別れた。

衛門督はまだ太政大臣家の東の対に独身で暮らしているのである。

結婚にある理想を持っていて長くこうして来たのであるが、時には非常に寂しく心細く思うこともあるものの、自分ほどの者に思うことのかなわないことはないという自信を多分に持って、そうした寂寥感<sup>せきりょう</sup>は心から追っているのであった。それがこの日の夕べからは頭が痛み出し、堪えがたい煩悶<sup>はんもん</sup>をいだくようになった。どんな時にまたあれだけの機会がつかめるであろう、どんなことも目だたずに済む階級の恋人であれば、その人の謹慎日とか、自分の方角除<sup>よ</sup>けとか、巧みな策略を作って、居所へうかがい寄ることもできるのであるが、これは言葉にも言われぬほどの深窓に隠れた貴女<sup>きじょ</sup>なのであるから、どんな手段でも自分はこれほど愛する心をその人に告げるだけのこともできようとは思われないと衛門督は思うと胸が痛く苦しくなるあまりに、いつも書



く小侍従への手紙を書いて送った。

この間は春風に浮かされまして御園みそののうちへ参りましたが、どんなにその時の私がまた御心証を悪くしたとかと悲しまれます。その夕方から私は病気になりまして、続いて今も病床にぼんやりと物思ものおもいをしております。

などと書かれてあつて、

よそに見て折らぬなげ歎なげきはしげれどもなごり恋しき花の夕かげ

という歌も添っていた。宮のお姿を衛門督が見たことなどは知らない小侍従であつたから、ただいつもの物思ものおもいという言葉と同じ意味に

解した。宮のお居間に女房たちもあまり出ていないのを見て、小侍従は衛門督の手紙を持って参った。

「この人がこの手紙にもございますように、今日までもまだあなた様をお思いすることばかりを書いてまいりますので困ります。あまりに気の毒な様子を見せられますと、私まで頭がどうかしてしまいそうで、どんな間違った手引きなどをいたすかしれません」

小侍従は笑いながらこう言うのであった。

「いやなことを言う人ね、おまえは」

無心なふうにそうお言いになって、宮は小侍従のひろ拡げた手紙をお読みにになった。「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくてひねもす今日はながめ暮らしつ」という古歌を引いて書いてある所を御覧になった時

に、蹴鞠けまりの日の御簾みすの端の上がつていたことを思い出すことがおできになり、お顔が赤くなった。院が何度も、

「大将に見られないようになさい。あまりにあなたは幼稚にできていらつしやるから、うっかりとしていてのぞかれることもあるでしょうから」

こうお誠めいましになつたのを思い出しになり、大将からあの時のことが言われた時、院から自分はどんなにお叱りしかを受けることであろうと、手紙の主が見たことなどは問題にもあそばさずに、それを心配あそばしたのは幼いお心の宮様である。平生よりもものをお言いにならず黙っておしまいになつたのを見て、小侍従はつぎほのない気がしたし、この上しいて申し上げてよいことでもなかったから、そつと手紙

を持って行った。そして忍んで返事を書いた。

この間はあまりに澄ましておいでになったものですから、軽蔑けいべつをしていらつしやると思つていたのですが「見ずもあらず」とはどういうことなのでしょう。もつたいないことですね。

今さらに色にな出いでそ山桜及ばぬ枝に思ひかけきと

むだなことはおよしなさいませ。

こんな手紙である。

### 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---